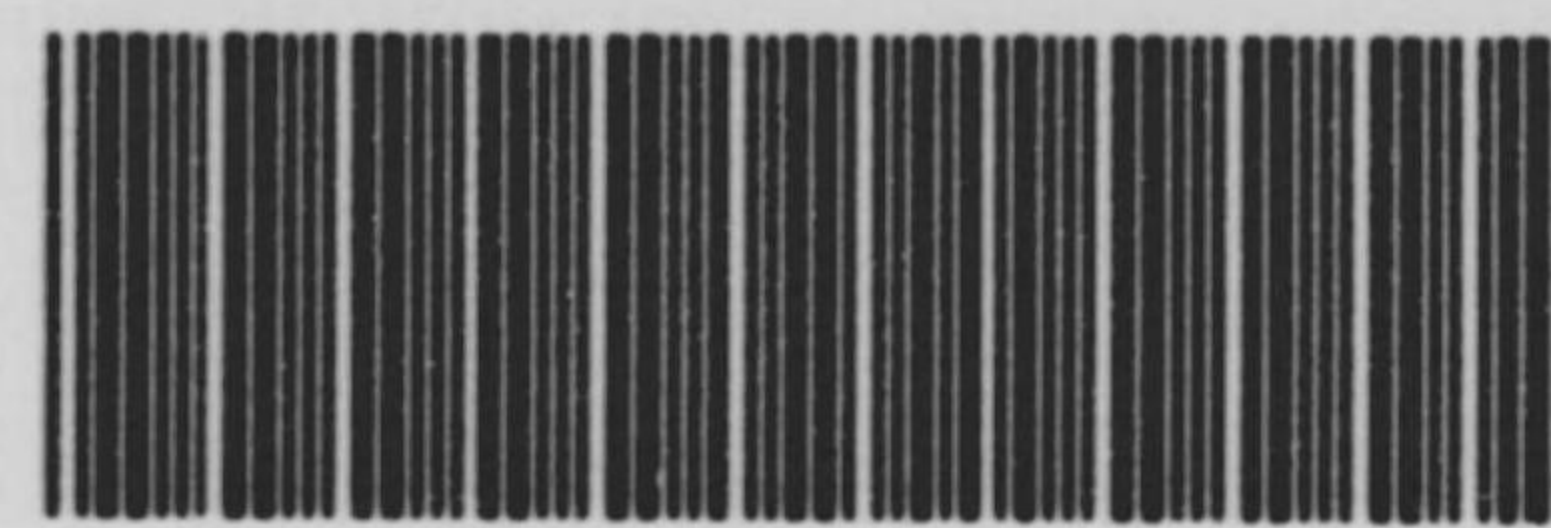


印度の現情

京都日印協会発行



* 0000219000 *

0000219-000

631-304

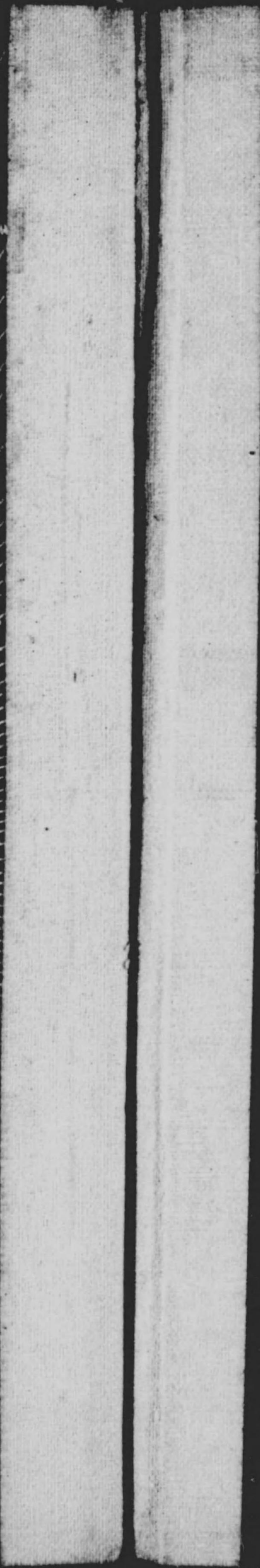
印度の現情

京都日印協会・編

京都日印協会

昭和8

AAB



ダージリンより望む



キンチンジャンガ峯(三八四六呎)

印度は國の中の國、世にもいと勝れし妙なる國
 我等の薔薇の園に鶯となりて我等は遊ぶなり
 我等が心はふるさとに、よし我等その外に追はるとも
 卿等は知れ、我等の心の止まる所、我等は住むと。
 おゝ、恒河の聖き流よ、卿は未だあの日を想ふや？
 我等が卿に水飲まんとて卿の許に降れる日を。(註)
 山を眺めよ、あの天の隣人を、巨峰の中の巨峰を、
 我等の楯、我等の武器、我等の保護者、譽あれ。
 山、その緑の膝の上に幾千の流れば戯るなり。
 この山の美さを凡ての國人は嫉み羨み
 ギリシャ、ローマ、エジプトは遙か彼方に譲り去らん。
 我等が名は残れり、我等が民族の標識も建てられたり。
 一つの國の子供等が争ふ事を神は望むや？
 我等は今も生けるやと尋ねる事は怪からずや？
 そは天は太古より既に我等に辛かりしかば。
 おゝ、イクバル、我等は此廣き世に一人の友もなし。
 淋しく我等は我等の心の悲しみを運ぶなり。

(裏面参照)

此詩は現在の印度の大詩人モハメッド、イクバル (Mohammed Iqbal) の歌ひしものにして、今日の印度並に印度人の心持ちを最もよく代表せるものなり(但し本文は原文なき爲獨文より試に譯せり)。

上表の寫眞は今夏も世界の猛者探險隊が失敗せしお馴染のキン(或はカン)チンジャンガ山(二八一四六呎)が陽光を受けて映ゆる聖姿であつて、四十五哩を距たダージリン(七千六百尺)より撮れるものなり。

(註) これは印度の大史詩ラーマ物語 (Ramayana) 中に現はれる傳説なるが、要は印度の土地と國民がこの恒河 (Ganga) に養はれ居る事を歌ひしものなり。

小序

天竺なる名稱の下に佛教を通じて比較的早くその存在を知らしめた印度——印度人は自らの國を印度と呼ばない。バラタと云ふ英雄の子孫の國と云ふ意味でバーラタヴァルシャ (Bharata-varsha) と呼んで居る——は彼の有名な唐の三藏法師玄奘の支那印度間の旅行記である「大唐西域記」等を通じて、多少とも當時の印度の國勢と云つた様な方面の知識を與へたが、それは精神文化を重んずる佛教を通じての偶然の所産であつて、形而上の問題を取扱ふ人々には現世の國勢なんかどうでもよい問題であつた爲、往時の印度の内容に就ての知識は一般に普及されなかつた。

然るに驚く可き事は、文明の利器が地上二物間の距離を短縮しつ

63/304

印度の現情

—内容—

○イクバールの詩

○小序

一、巨數に映る印度……………一

- (A) 一般
- (B) 宗教
- (C) 政治機關
- (D) 財政
- (E) 産業
- (F) 農業
- (G) 交通
- (H) 教育
- (I) 保健衛生
- (J) 軍事

二、革命の原因と行程……………一七

三、日印通商條約問題……………二五

- (A) 日本側激怒の原因
- (B) 貿易關係
- (C) 高壁の關稅
- (D) 結局損をするものは

三

二

つある今日も、我國の一般の人々は印度と云ふ概念を釋尊の生地、暑い國、随つて黒坊の居る國位で綜合して居ることである。しかし實際は印度全土が暑いのもなく、黒坊のみが生存を許された場所でもない。山嶽地方を除いても日本より寒いところもあり、雪を欺く皮膚の持主もある……と云ふ事を知らない程我國の人々は印度の實際に疎い。

日英間の危機が傳へらるゝ今日、何がさうさせるかの原因が掴み得ないのも道理である。本冊子がかうした方面に多少の知識を與へる何等かの糧ともならば幸甚である。

昭和八年十月

編者識

四、印度を旅行する人に……………三五

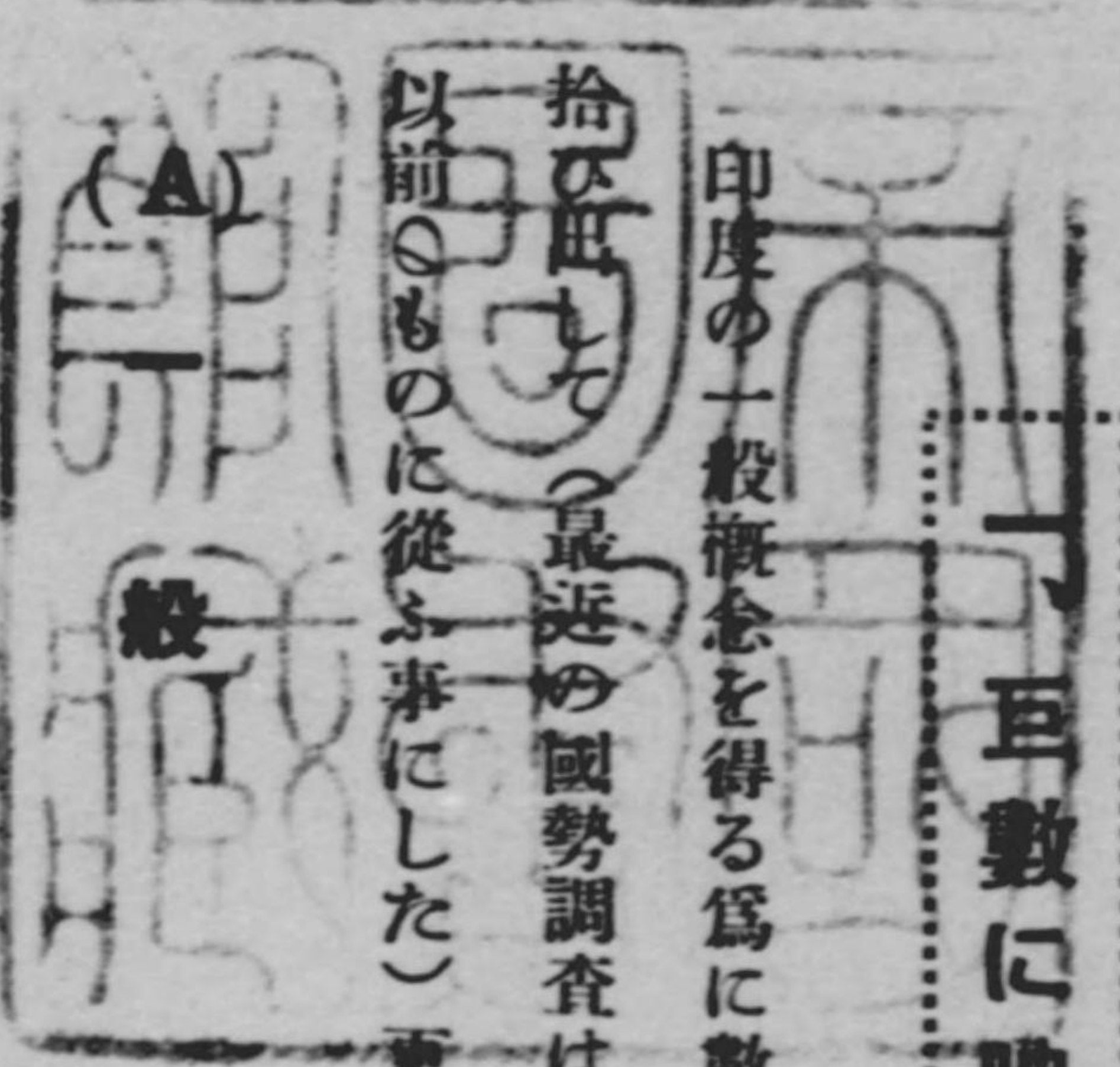
- (A) 印度内地旅行の準備
- (B) 汽車旅行の注意
- (C) ボックセス
- (D) 食物
- (F) 言語と文字

五、名所舊蹟案内……………四二

其他、寫眞十數葉、參考書、地圖

丁、巨數に映る印度

印度の一般概念を得る爲に數字を利用する國勢調査の最近なものより、必要と認むるものを拾ひ出して（最近の國勢調査は一九三一年に行はれたが、その中から發見出来ないものはそれ以前のものに従ふ事にした）更に多少の説明を之に加へて見よう。



英領印度（一八七六年以來 British India と稱す）は一九一九年の憲法發布以後に於ては

十五州、百十八の大侯と四百四十五の小侯の領州に依つて構成されて居る。

面積 五、〇五五、七七〇平方浬

人口（一九三一年） 三五〇、五〇〇、〇〇〇人（一九二一年度三二五、五九八、五〇〇）。——英本國とスコットランドを併せたより稍小なるベンガール州の人口は四千五百五十萬で相當の密度を有して居る。

海外在住者（一九二九—三〇年）

セイロン 九五九、〇〇〇人
 マウリテイ 二八一、〇〇〇人
 南アフリカ 一六〇、〇〇〇人
 東アフリカ 五五、〇〇〇人

マラヤ 七〇〇、〇〇〇人
 英ギニヤ、トリニダット及ヤマイカ 二七六、〇〇〇人
 フチー島 六九、〇〇〇人

都市の數(一九二二年) は二三一三、人口十萬以上三三三。(但し三一年には三七七に増加して居る)。今主要の都市と人口を擧ぐれば(三一年)

- | | | | |
|--------------|-----------|-------------|-----------|
| (1) カルカッタ | 一、四八五、五八二 | (1) ボムベイ | 一、一六一、三八三 |
| (3) マドラス | 六四七、二三〇 | (4) ハイデラバード | 四六六、八九四 |
| (5) デリー(首府) | 四四七、四四二 | (6) ラホール | 四二九、七四四 |
| (7) ランゲーン | 四〇〇、四一五 | (8) アーメダバード | 三一三、七八九 |
| (9) バンガローア | 三〇六、四七〇 | (10) ラクノー | 二七四、六五九 |
| (11) アムリツサー | 二六四、八四〇 | (12) カラチ | 二六三、五六五 |
| (13) プーナ | 二五〇、一八七 | (14) カウンブール | 二四三、七五五 |
| (15) ナガブール | 二一五、一六五 | (16) ベナレス | 二〇五、三一五 |
| (17) シュリナガール | 一七三、五七三 | (18) バトナ | 一五九、六九〇 |
| (19) マンダレー | 一四七、九三三 | (20) ショラプール | 一四四、六五四 |

(7)はビルマの新都であり(19)は舊都である。

(一九二二年國勢調査に於けるボムベイ男女の比率は男千人對女五百廿四人、カルカッタ男千人對女四百七十人の割で男が斷然多い)。

一年平均温度(攝氏)

| | | | |
|--------|-------|-------|-------|
| マドラス | 二七、七度 | コロンボ | 二六、八度 |
| ボムベイ | 二六、三度 | カルカッタ | 二五、五度 |
| ペシャワール | 二一、九度 | | |

ペシャワールより更に東北に進んだカシユミール地方に行けば夏は日本より涼しく冬暖か
 にして、園には果物満ち、遙か北方には二萬尺のヒマラヤ山を望み、氣候的には米國カルホ
 ルニヤに比して天下の樂園である。

最高地域 カラコルム連山 八六二〇米

主要河川

| 名 | 稱 | 長サ(單位浬) | 流域地(單位平方浬) |
|----------|---|---------|------------|
| インダス | | 三、一九〇 | 九六、〇〇〇 |
| ブラーフマプトラ | | 二、八〇〇 | 六七、〇〇〇 |
| ガンガ | | 二、七〇〇 | 一〇六、〇〇〇 |
| サルベ | | 二、五〇〇 | 三二、五〇〇 |
| イラワデー | | 二、一五〇 | 四三、〇〇〇 |

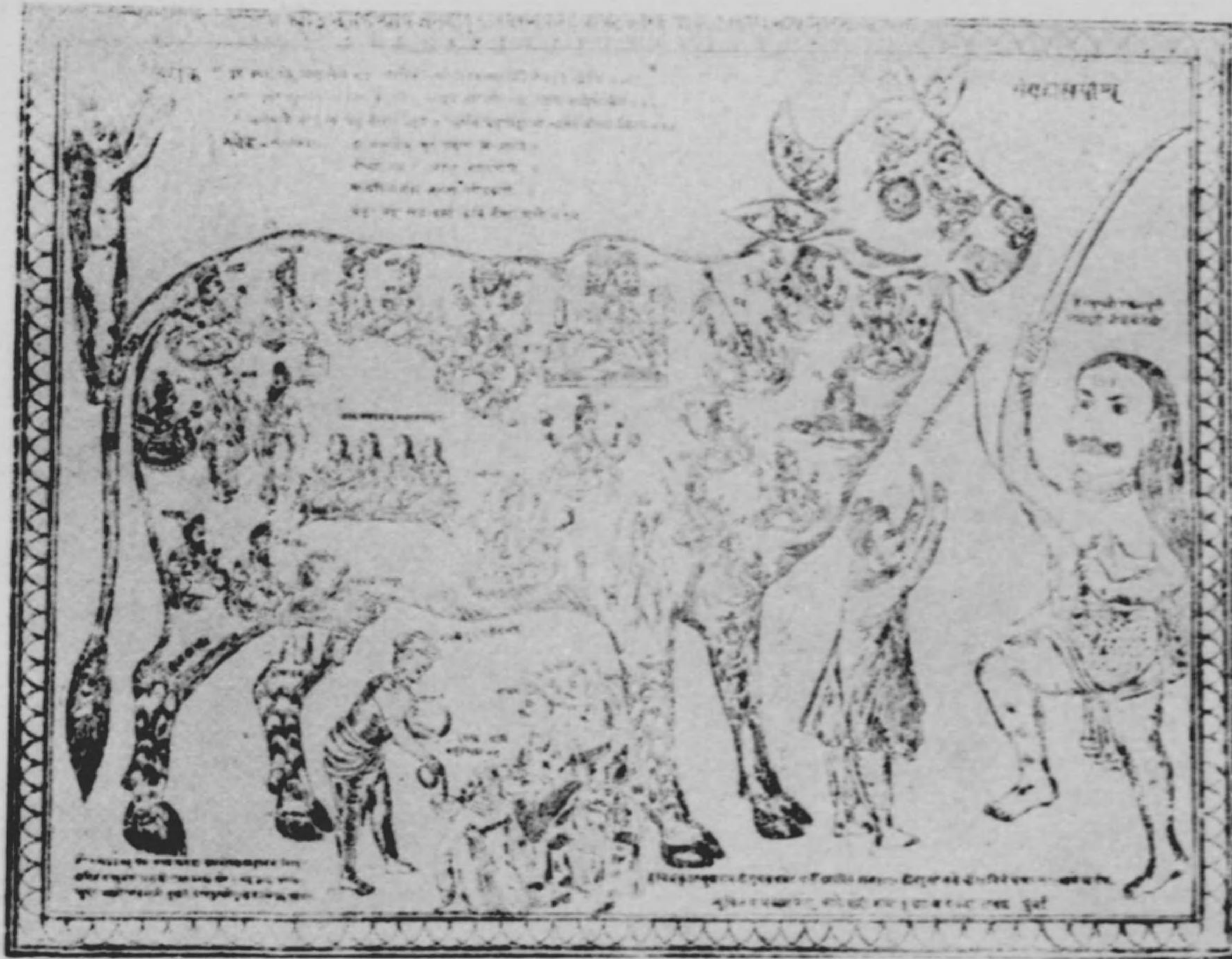
(B) 宗教別 (一九三一年)

| | | | |
|-------|-------------|------|------------|
| 印度教徒 | 二三九、五九八、六五三 | 回々教徒 | 七六、三六七、二三〇 |
| 原始教徒 | 七、六七一、八〇三 | 基督教徒 | 四、七〇二、四二〇 |
| シーク教徒 | 四、三二三、七三〇 | 佛教徒 | 四三五、八五八 |

但し此佛教徒と云ふは印度内地だけで、セイロンビルマを合すると一一、六〇〇、〇〇〇(一九二一年)となり年々印度内地に於て教線増化しつゝあり。尙一九二一年の統計に依るその他の宗教別左の如し。

| | | | |
|------|-----------|-----------|-----------|
| 耆那教徒 | 一、二〇〇、〇〇〇 | 拜火教徒 | 一〇一、七八八 |
| 猶太教徒 | 二一、七七八 | 其他(卅一年統計) | 一、八三三、五四八 |

宗教事情 遠くは四千年の昔に根ざし神の数を廿五萬も有つ教を含む印度全體の宗教を簡單に語る事は無理な話である。然し元來が宗教國として宗教でなければ夜も明けない國のこの間の事情を多少知る事は一方印度人の習慣、風俗、國民精神否思想と行爲を知る事であり極めて重要であるから要領のみを記して見る。



徒教度印るすに切大を牛牝



徒教々回るす拜禮團集

印度教^{ヒンドゥイイズム}

この教は古代の波羅門教に根ざし、今日の如き形態を有つに到つたのは佛教の衰亡した八世紀以後のことで、その宗派の數も無數、混沌たるものがあるが、ブラーフマ(Brahma)シバ(Shiva)、ヴィシュヌ(Vishnu)は三大神として崇められる。凡そこの教への特長は牝牛(Ga)が絶対神聖なもので斷じて殺す事や勞動に従事することも出來ず、汽車さへ彼女の前では停車させなくてはならない。だからこれを殺すマホメット教徒と争ひの絶えないのも自明の理である。かく牛を大切にするかと思ふとアルハバードにある凄惨な形相をした女神カーリ(Kali)には一日百頭から百五十頭の山羊が犠牲に供へられると云ふ妙なこともある。

回々教 マホメットの弘めし宗教で唯一の神アラー(Ali)を拜し偶像は祭らない。印度に傳來したのはモガール帝國(十六世紀)が建設された以後である。凡そこの教徒に豚の子(Swar) (Swar)と云ふ言葉は絶対に云つてはならない。この宗教は豚が實に嫌ひで随つて豚を食ふ支那人とは相容れない。印度教徒は牛が殺されるとその復讐として回々教徒の中へ來て豚を絞め殺すのであるが、これが前記の二者間の宗教闘争の原因である事は云ふまでもない。かうした争は英國人に取つて最も大なる喜びであらう。

シーク(Sikh)教 宗教の起源としては比較的後代に屬し、一四六九年ラホールに生れたナーナク(Nanak)の創めたもので、印度教と回々教の長所を混合したものであり、その教理はグラントサヒーブ(シーク族に限る聖典)に攝められて居る。この宗教は正義の戦を許すのみならず尚武の精神を鼓吹するため、國民運動などに敢然と立つものゝ中には此教徒が多く發見される。過日大朝紙に紹介された印度人で上海事件の時日本の爲に多少働き日本の知人を求めて來朝した一青年も此教徒である。

佛敎 ブツトキョウ 云ふまでもなく紀元前五世紀出世の釋迦の説いた教である。現在印度内地に於てはネパールとブータン民族と佛敎に憧憬を有つ人々の間に信仰せられるのみで、英領印度としてはセイロンとビルマにその教田がある。而しこのセイロン等の佛敎はネパールやチベット、日本などの所謂北方佛敎と異つてその思想が消極的である小乘教(Hinayana)に屬し、ネパール等の佛敎は小乘に對し大乘(Mahayana)と云ふのである。

耆那教 ジヤイナ ジヤイナと云ふ言葉は勝利者を意味するジナ(Jina)から出たもので、勿論一切の惡の征服者を意味するが、その勝利者とは直接にはその教祖マハーヴィーラ(Mahavira大力)を指し間接には信者の未來の位置を意味する。教祖は釋迦と同時代の人で、人間の行爲を最も嚴肅に取扱つて居る。隨つて此宗教は禁欲主義である。印度の大立物マハートマガンディーも元來此教徒であるが、而し彼は今一宗一派に偏せない。勿論それは全宗教を統一しようと思ふからである。だが宗教の一致統一は事實出來ない。これは國民運動の一つの痛である。

拜火教 ベルシャヤ人が七世紀頃故國で回々教徒の迫害を逃れて今のボムベイ地方に棲止して奉戴する宗教で、紀元前八世紀に出たゾロアスターの教の流を汲むものである。この宗教は二元教で世の中は全部善惡の鬭争で終には善の勝利を信するものである。

キリスト教は豊富な資金を有し先づ兒童の教育に目をつけ教線の擴張を期し、今日にては比較的多數の教徒を得るに到つたが、而し今後の増加は困難でこれが爲歐洲キリスト教徒は印度のキリスト教化に就て今や盛な運動を行つて居る。

其他原始教即ち自然宗教(Naturreligion)があり、超自然のものは凡て崇拜の對象となり奇怪なものが多い。

尚新興宗教として梵協會(Arya-samaj)と梵協會(Brahmas)を挙げたい。前者はダヤーナ

ンダ、サラスワティー (Dayanands Sarasvati 一八二四—一八三年) の創建するもの、後者はタゴール翁の祖父ドヴァルカナート、タゴール、Dwarkanath Tagore 一八六一年生) の創唱するものであつて、ともに古代印度宗教の眞精神に立ち還らんとするものである。その教は最も合理的で共に大學を擁して青少年士女の養成をして居る。(筆者は曾てこの二大學に遊學した)

(C) 政治機關

印度の政治は英國皇帝任命の總督の統制の下に行はれ、その機關に左の様なものがある。

印度會議 (India Council) は八人乃至十二人の政府任命者に依り構成されて居る。

參事院 (Council of State) は卅三人の一般投票選出者と廿七人の官選者とより成る。

立法會議 (Legislative Assembly) は一〇四人の一般投票選出に依るものと、四十一人の政府任命者によつて出來上つて居るが、此機關は將來に於て印度の憲法を作らんが爲に、而も印度の國民運動の影響を受けて一九二三年始めてデリー市に集會されたものである。自主黨即ちスワラーヂ (Swaraj) 自治、獨立) を目的とする一派は曾ては勢力があつたが現在では英國の

斷崖主義の下に活動が出來ない有様になつて居る。黨派別にすると次の様である。

自主黨 四三名、獨立運動の中心である。

國粹黨 一九名、等しく獨立運動に参加するものであるが、宗教の信仰上から前者に加味出來ないもの、一派である。

獨立黨 二二名、これは主としてイスラム教徒中より選出されたものである。

英人代表者 二〇名、印度に住む英人の中から選出される。

印度總督選任者 四〇名、獨立運動に對するもの、中心である。

政廳はデリーにあり夏期になると今回日印綿業の會議所、七千六百尺の北方の高地シムラ (Simla) に移轉する。

(D) 財政

支出(一九二八—一九二九年) 一、二五二、五六〇、〇〇〇留比

支出(同)

同

(一留比 Rupee は約〇、六〇金圓に相當す。但し現在の相場では比は約一圓廿錢の價值がある。即ち元來百圓で百六十留比貰へるものが八十留比しか今は貰へない云ふわけである)

右の支出の内譯中主なるものは、

| | |
|-----|---------------|
| 軍事費 | 五六七、二〇〇、〇〇〇留比 |
| 鐵道費 | 二四九、九〇〇、〇〇〇留比 |
| 教育費 | 一五七、四〇〇、〇〇〇留比 |

國價(一九二七年三月卅一日) 九七五、五四〇、〇〇〇〇〇留比
 一人の年收 三〇留比(一昨年末)

(但し最新の統計に依るとボムベイ市民の平均年收は百留比、地方人のは八五留比とあり)

(E) 産業

| | |
|---------------|-----------------------|
| 輸入(一九二八年) | 一八四、〇〇〇、〇〇〇磅 |
| 輸出 | 一四三、六〇〇、〇〇〇磅 |
| 鑛物(一九二六年) | 金 一〇八九二兩 |
| ダイヤモンド | 六八、六カラット 鐵 一、七〇〇、〇〇〇噸 |
| マンガン | 一、〇〇〇、〇〇〇噸 銀 一四五、三二二兩 |
| 錫 | 二二、〇〇〇噸 鉛 三六三、〇〇〇噸 |
| 石炭(一九二六年) | 二二、〇〇〇、〇〇〇噸 |
| 森林(一九二一—五二六年) | 二八九、〇〇〇〇平方籽 |
| 木材輸出(一九三〇年) | 二、七〇〇、〇〇〇〇留比 |

紡績

| | | | |
|---------|-----------|-------------|---------|
| 一八八〇年 | 五五會社 | 從業者三一九、〇〇〇人 | 据付機臺數 |
| 一九二八年 | 二七九會社 | 同 | 四〇、〇〇〇人 |
| 年次 | 据付錘數 | | 据付機臺數 |
| 一九一六—一七 | 六、七三八、六九七 | | 一一四、六二一 |
| 一九一七—一八 | 六、六五三、八七一 | | 一一六、四八四 |
| 一九一八—一九 | 六、六八九、六八〇 | | 一一八、二二一 |
| 一九一九—二〇 | 六、七六三、〇七六 | | 一一九、〇一二 |
| 一九二〇—二一 | 六、八七〇、八〇四 | | 一二三、七八三 |
| 一九二一—二二 | 七、三三一、二一九 | | 一三四、六二〇 |
| 一九二二—二三 | 七、九二七、九三八 | | 一四四、七二四 |
| 一九二三—二四 | 八、三三三、二七三 | | 一五一、四八五 |
| 一九二四—二五 | 八、五一〇、六三三 | | 一五四、二九二 |
| 一九二五—二六 | 八、七一一、一六八 | | 一五九、四六四 |

その他工場(一九二五年統計)
 毛織會社七 麻會社八十八 製紙會社七 石油會社十六

右の産業に従事するものは全人口の十、五パーセントであり(一九二二年)、その中資本家とも云ふ可きものは右率の一パーセントとである。更に此率の四分の一は拓殖事業に従事するもの

であるから産業従事者は四分の三の率に當る。若し更に右率の中より一、五パーセンの運送並に鑛山労働者及び何等組織を有せざる産業に従事する三パーセンを引き去るなれば本當の意味に於ける産業に従事するものは全人口の五、二五パーセント一千六百九十萬人と云ふわけになる。かくして印度は世界第八位の産業國である。

(F) 農業 (一ヘクターは約一町廿五歩)

| | |
|--------------|-----------------|
| 私有並に村有地 | 一二五、〇〇〇、〇〇〇ヘクター |
| 國有地 | 一三二、〇〇〇、〇〇〇ヘクター |
| 私有並に村有地に働く者 | 一七一、〇〇〇、〇〇〇人 |
| 國有地に従事する者 | 六九、〇〇〇、〇〇〇人 |
| 私有並に村有地よりの税金 | 一七九、〇〇〇、〇〇〇留比 |
| 少しでも土地を所有する者 | 七四、六六四、八八六 |
| 米穀官吏並に監督者 | 二六八、二三九人 |
| 下僕、下女、小作人 | 二一、六七六、一〇七人 |
| 田畑 | |
| 米 | 三三、〇〇〇、〇〇〇ヘクター |
| 粟 | 一七、〇〇〇、〇〇〇ヘクター |

小麦 一二、〇〇〇、〇〇〇ヘクター 綿 九、〇〇〇、〇〇〇ヘクター
その他麻、落花生、甘蔗、茶、コーヒー、~~等~~等の土地あり。小麦の年收は約千萬頓でありその九割は内地で消費される。

家畜(一九二四—二五年)

| | | | |
|---|--------------|----|-------------|
| 牛 | 一四六、〇〇〇、〇〇〇頭 | 水牛 | 三八、〇〇〇、〇〇〇頭 |
| 羊 | 三五、〇〇〇、〇〇〇 | 山羊 | 四五、〇〇〇、〇〇〇 |
| 馬 | 二、三〇〇、〇〇〇 | 駱駝 | 六〇〇、〇〇〇 |

曾ては牛疫にて斃れたるものに十萬頭を越えたるが、その後防疫に努めたる結果一九三〇年に於てはその三分の一までに減少するに到つた。

(G) 交通

| | |
|---|----------|
| 國有道路 | 六〇〇、〇〇〇軒 |
| 鐵道(一九三〇年) | 四一、七二四哩 |
| (一八七二年には五、三六九哩であつたが軍事上等の必要から今日にては英本國の二倍の長さを有つに到つた。この中七割五分は國有で爾餘は私有と云ふも、殆んど政府の息がかゝつて居る。) | |
| 乗客數 | |
| 一等 | 一九二三一四 |
| 二等 | 一、二〇〇 |
| 特三 | 一〇、二〇〇 |
| 三等 | 一一、二〇〇 |
| 總計(單位千) | 五四四、〇〇〇 |
| | 五六六、〇〇〇 |

| | | | | | |
|--|-------|--------|--------|---------|---------|
| 一九二四―五 | 一、一〇〇 | 九、八〇〇 | 一二、三〇〇 | 五五三、五〇〇 | 五七六、七〇〇 |
| 一九二五―六 | 一、〇〇〇 | 九、九〇〇 | 一三、六〇〇 | 五七四、〇〇〇 | 五九八、五〇〇 |
| 一九二六―七 | 一、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 一四、八二〇 | 五七八、〇〇〇 | 六〇三、八二〇 |
| 一九二七―八 | 一、〇〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 一七、五〇〇 | 五九五、五〇〇 | 六二四、〇〇〇 |
| 一九二八―九 | 九〇〇 | 九、六〇〇 | 一八、〇〇〇 | 五九一、〇〇〇 | 六一九、五〇〇 |
| 一九二八―二九年度の収入は十一億三百萬留比である。同年度の電報(有線)取扱數二〇、二四一、〇〇〇 四通。船舶の出入は一九二四―二五年度三千九百卅二艘でその噸數は八百六十一萬四千噸である。 | | | | | |

一四

(H) 教育方面

新聞(一九二五年) 一、四〇一
雜誌(同) 三、一四六

書籍の刊行は獨逸に次ぎ日本と略同等世界第二位にある。

書籍刊行(一九二五年) {自國語 一四、七二八
外國語 二、三〇二}

人口の約八パーセントしか読み書きが出来ない。

| | | | |
|------|------------|----|-----------|
| 大 學 | 十八(一九二六年) | 學生 | 六、六二三 |
| 男小學校 | 二〇八、〇一七(同) | 生徒 | 九、〇〇〇、〇〇〇 |
| 女小學校 | 二九、八〇六(同) | 生徒 | 一、一〇〇、〇〇〇 |

工科大学等 一七(一九二九年) 學生 四、一五九
印度に於て話されつゝある言語の種類は二百廿二種もある。

(I) 保健衛生方面

一九二五年に於ける千人に對する生死の率は生が三三、七パーセントで、死が二四、七パーセントの割である。コレラで死亡せるもの而も印度教徒の七大聖地の一つたるハルドワルにて一九二二年に死せるもの四十萬人に昇り二八年には三十五萬人以上もあつた。又アルハバード一九二五年度に同じくコレラで死せるもの三十萬あり。(註、筆者は一九二三―四年度彼地にあり。コレラ等の原因は一般の不衛生のみならず不潔なる恒河の水を巡禮者が所謂御神水として飲むに依るものと察せらる)

ペストに斃れたるもの一九〇七年には百十六萬人の多きに達したが逐次減少し、一九二八年には十二萬五千入となり、天然痘に斃れたもの一八六九年には百萬人に對し二二二〇人の割であつたが、一九二八年には三六〇人の割となつた。何れにするもこの三病に依つて斃れるものに十萬人を超ゆる程未だ衛生知識は發達して居らない。

マラリヤに冒さるゝ家族が年々八百萬家族あり。レブラも相當あるが一九二五年以後それに對する設備見るべきものがある (Indian Council of the British Empire Leprosy Relief Association)。一九二八年に強制的に種痘を施されたるもの九百四十萬人の多きに達して居る。阿片の輸出は從來世界阿片の七割六分を輸出して居つたが、一九二六年のゼネバ會議後一割に制限されて居る。

(J) 軍事

常備 英人 五八、〇〇〇 印度人 一三二、〇〇〇
 (一六五〇人に對して一人の兵士と云ふわけである)

軍用飛行機も相當にあり二千二百人の英人、一千二百人の印度人がこれに服務して居る。表面に現はれた軍事の設備などは數の上で明瞭であるが、何分英國が極東に勢力を維持せんが爲の軍隊であるから、その實際の内容は極めて意外なものゝある事を忘れてならない。

二、革命の原因と行程

此の項目ではどうして今日のガンディー一派の反英運動が行はれる様に到つたかと云ふ原因と、その運動の實際事情を簡單に述べて見度いと思ふ。

一八五八年英國は印度を直接統治すると云ふ宣言を發したのであるが、印度人の氣分なり風俗習慣等を慮つて、(一)宗教に干渉がましい事をしない、(二)印度人を官吏として採用する、(三)印度の風俗習慣を無視しないと云ふ三條件を附した。印度人が今日の革命運動をなすに到る動機は、つまりこの三つの公約が満足に果されない點から芽生えるのである。

英國は印度を直轄する様になつてから、印度の幸福の爲にと物質的開拓を始めたのであつたが、印度人には英國の搾取手段としか見えなかつた。否先の公約を無視するものとの不平さへ生じて來たのである。不平の聲を發するものは皮肉にも歐洲の教育を受け英國の事情を知つて居るものであつた。尙皮肉な事には印度内に於て英國風の高等教育を受けたものが英國の印度

統治策に不満を懐いた事である。かうした事が後に英國をして倚らしむべし知らしむ可からずの教育主義となつた事は明である。

此間に於て注意すべき二つの運動がある。一つは將來の印度の自治の爲一先づ歐洲文化の美點、英國政治の長所を研究して行かうと云ふ運動で、一八八五年(明治十八年)に始められた印度國民議會なるものはその所産である。又の一は墮落し切つた印度教徒を覺醒さし宗教社會政策に依つて印度人の結束を計らうとする運動である。これが前に書いたダーヤーナダアイリヤサマジュの聖協會等の宗教運動である。

既に印度人の中にかうした覺醒が出て來た時、明治廿七年イタリーはアフリカのアビシニヤと戦つて敗を取り、明治卅二年英國は南アフリカのトランスバールで散々手を焼いた。かく歐洲人とてと云ふ考を印度人に植ゑつけた矢先き、明治卅七八年に露國が小國日本に擊破されたと云ふ事は印度人に取つて決して他人事でなかつた。日露戦争に日本が勝つたと云ふ事は印度人に取つては日本人同等の喜びであつた。俄然明治卅八年に國民運動は勢を得て來た。今日の運動も全く此處に根ざすのである。

- (一) 國民運動發生時代 (明治卅八年—四十年)
- (二) 暴力反抗時代 (明治四十年—大正八年)
- (三) 非協同運動時代 (大正八年—十一年)
- (四) 合法運動時代 (大正十一年以後)

かうした四時期に分たれた國民運動革命運動に多少色彩をつけて見ると、第一の國民運動を發生さす直接の原因はカーゾン(Elgin)總督時代に於ける教育の立直しである。カーゾンは印度政府の一手で印度の統治補助の爲教育制度なり施設を變更しようとしたが、これは印度人の高等教育の阻止と云ふ事なのでベンガール州には早くも不平の空氣が流れ出した。これが明治三十八年の事である。然るにこれに尙火をつけた事は、カーゾンがベンガール州を二分して勢力を殺がうとした事である。元來ベンガール州は當時の首都カルカッタのある州であり文化の中心であつたからインテリ層中には反英の空氣が強くと不安であつたが、カーゾンは同年十月これを押し切つてベンガール州を二分する布告を出した。忽ち自治スワラジユ(*Swaraj*)と自國スハデーシ(*Swadeshi*)の聲は州内に満ちたのであつた。

同年十一月カーゾンの彈壓主義に代るに比較的妥協的なミントー(Minto)が總督となつた

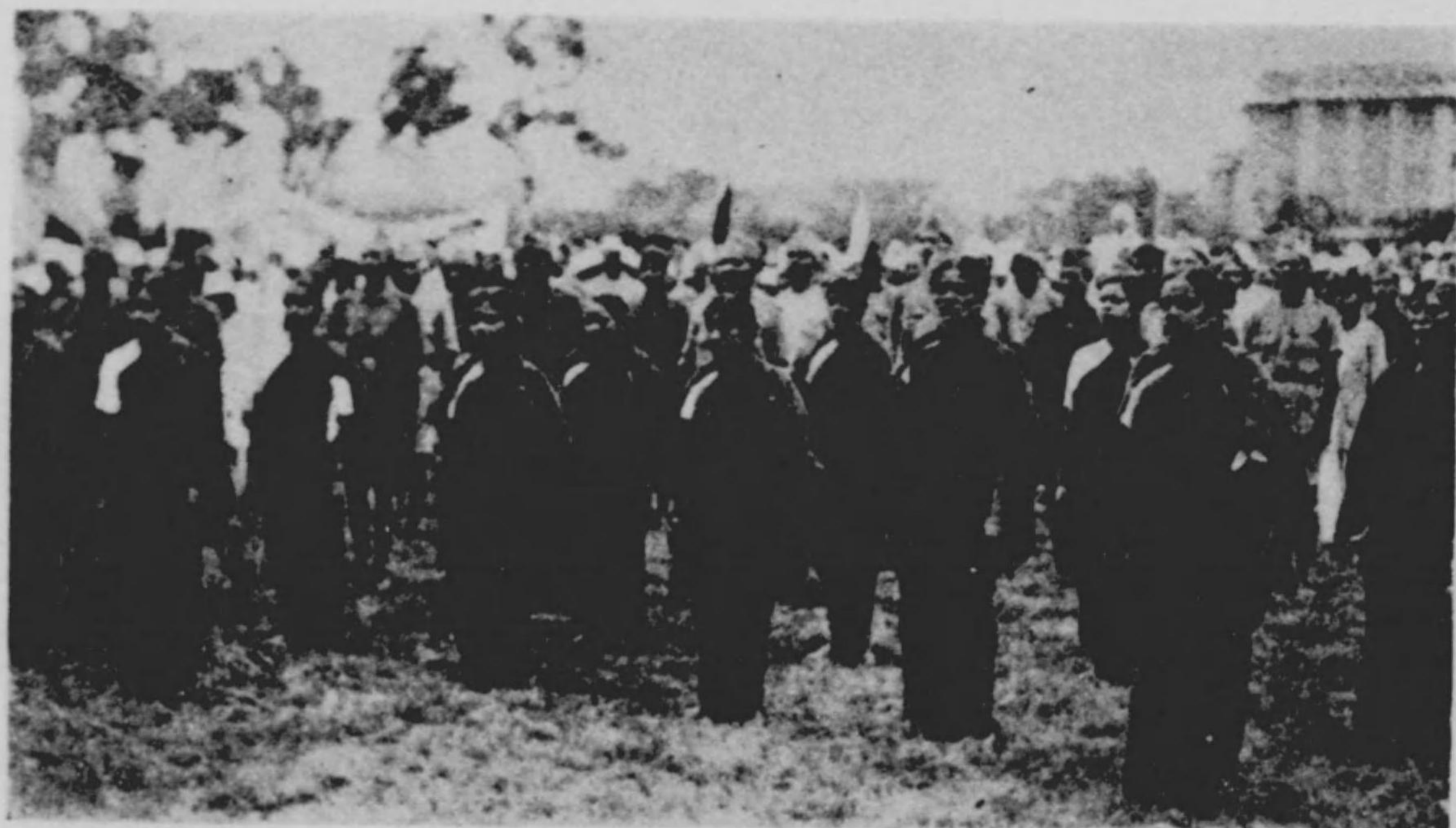
が、彼も祖國の爲カーゾンの方針を一變する事は出来なかつた。此間に國民運動はマドラス、ボムベイ、パンチャブ(五河地方)、中央印度に飛火した。然し未だ主に言論の上の排英運動であつた。

然るに明治四十年國民運動の先覺者ラジュバトライ Rajput Rai がラホールに於て無裁判で投獄された事に依つて終に暴に報ゆるには暴を以てせよと云ふ急進者が、實際運動に入つて射殺爆弾と云ふ非常手段に訴へる様になつた。此處に於て英政府も急に威壓手段を以て臨むに到つた。而し印度人はこれに屈する模様なく終に英本國に於ては大官に恨の刃、呪ひの彈丸が身邊を見舞ふに到つた。英國は此處に於て再び懐柔策を取り、英國皇帝は自ら印度を訪問し、ベングール二分の事を中止させたり、首府をデリーに移轉すと云ふ様な事が行はれた。而も明治四十五年首都移轉の際、總督ハーディング(Harding)は都入の時ピストルに見舞はれ傷を負ふた。かくして不安の空氣は濃厚になるばかりであつた。

突如歐洲の大戦が勃發した。急進派はこの際ばかりとラホール附近に於て叛亂を企て大正四年以後屢々計劃を實行せんとしたが然し事は未然に彈壓された。自らを教養して後自治へと進



反英運動



女子のモテスレション

まんとする漸進派は兎も角歐洲大戰に際し英國支持の態度を取り、回々教徒も英國が此の教の法王であり國王の居るトルコ國を苦しめないと云ふ約束の許に英國に肩を持つ事にしたのであつた。且英國は戦後に於て印度の自治を許すと公約し時の總督チエルクスフォード (Chernsford) は印度統治革新案を作り、大正八年暮に英國議會の承認すら得たのである。大正十年印度議會 が設けられたのもこの理由に依る。此年十一月英國はアフガニスタンの獨立を承認した。

印度議會と云ふも、それは議決權を持つものでなく、一つの諮詢機關に過ぎなかつたので、英國は戦前に印度の自治を許すと公約して置きながら、如斯空名のもを設けるとは印度人を欺くものと印度人の怒を買つたのであるが、その時適々印度政府の委員長であつたローラツト (Rowlatt) が峻嚴なる治案維持法を作り上げてしまつたので、パンチャブには早くもこの法案反對の烽火が擧げられた。

同州アムリツァー (Amritsar) にも兼て不穩の形勢があると云ふので將軍ダイヤー (Dyer) の軍隊が駐屯して居つたのであるが、四月十三日大事件を惹き起してしまつた。その日此市で祭禮に集つた一團をその種の運動と誤認したのか——印度人は英軍隊がつれづれの餘り面白半分

にやつたと云つて居る——機關銃でこの群集をバラノと薙ぎ斃した。死傷五千人と云はれて居る。印度人は國悼日として今にこの日を悲しき思ひ出として一日斷食し死者の靈を慰めて居るのであるが、此處にこの印度人の悲憤を代表して立つたのがモハンダス、カラムチャンド、ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi) のハルタル (Hartal) サチャグラハ (Satyagraha) の二つのモットーが高く揚げられたのである。ハルタルと云ふのはストライキの事でサチャグラハとは眞理の把持と譯され一切の惡を征服する事を意味し、更に英國の惡政を斷乎排撃し協同しないと云ふのである。終に英國品に對するボイコットが行はれた。

更にガンディーを怒らしたのは英國が戦前回々教徒に公約したトルコ皇帝の宗主權 (キラフアット Khilafat) の事であつた。英國は先の公約を果さずトルコ皇帝の勢力を殺いでしまつた。ガンディーが回々教徒に與へた同情は一つの宗教統一の政治運動の前提となつた。

一九二二年(大正十年)リーディング (Reading) が總督となつた時は反英の聲は愈々高くなつた。そして非常手段に訴へる運動が屢々あつた。一九二二年英國はこれが爲に彼の惡法ローラット法案を廢したが、ガンディーを騷擾罪に問ふて六ヶ年の禁錮に處した。而しその後マクド

ナルドの勞働内閣が英國に出来るや溫和策を取り、ガンディーも一九二四年(大正十三年)二月には釋放された。

しかるに一方印度議會が開かれて以來、合法手段に訴へて自治運動を進めて居つたスワラージュ(自治)黨も一九二五年ネール (Nehru) が指導者となるに及んで愈々ガンディー一派と接近する様になつて來た。一九二七年(昭和二年)英國に於てはサイモン (Simon) 以下七名の委員が擧げられ、印度に赴き實際を見て新憲法を作らうと云ふ事になつたが、それはお手盛案で印度人が一人も加へられなかつたと云ふ事情から、スワラージュ等は印度及び印度人の事は印度人の手に依つてなすべしと排英運動を起したのである。サイモン一行が一九二八年歸國して後諸政黨代表者はボンベイに集り、ネールを議長として憲法起草委員會を組織して遂にその草案を發表した。これこそ印度の完全なる自治を求めたものである。

一九二八年十月サイモン委員會が再び印度を訪れた時、諸所に排英運動が起り、十二月にカルカッタに開催された印度國民會議には、ネールの自治案を可決してしまつた。そして英國がこれを承認しない時は非協動運動を大々的に起すと云ふ決議を公に發表し、同年十二月ラホー

ルに行はれた印度國民會議に於て、ガンディーは自治よりも印度獨立の實行に着手すべき事を唱へ、一九三〇年の一月を期して全國に亘る反英運動を執行する事を決議した。

その後ガンディーが英國の圓卓(Round Table)會議に出席し英國の不誠意に愛憎をつかし、上陸第一歩從來の無暴力抵抗主義を捨て、實力抵抗主義を宣したる爲再び捕はれの身となり、最近健康の爲釋放された事や、この間タゴール翁が彼を獄中に訪問し氣脈を通じた事や、鹽の問題などは吾人の記憶に尙新しき事であるのでこれ等の記述を省く。

曾てガンディーが圓卓會議から歸つて捕はれるや、一外國新聞は英國首相とガンディーの二人を鐵鎖で結ぶ漫畫を描き「何れが繋がるか？」と題して居つたが、英國は果して何時迄印度をその鐵鎖で繋ぎ得るであらうか。否印度現在の存在は英國の霸者的精神に却つて鐵鎖を結びつゝあるのであるまいか？

三、日印通商條約問題

(A) 日本側激怒の原因

第一條 日本帝國皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ハ印度國へ輸入スルニ際シ別圖ノ製産ニ係ル同種ノ物品ニ適用セラル、最低率ノ關稅ヲ賦課セラルヘシ。

これが一九〇四年(明治三十七年)八月廿九日調印され翌年の三月十五日より實施された日印通商條約の先頭を承る本文である。然るに英國側は本年(一九三三年)四月十日何の豫告もなしに突如この明文を破棄して、印度の最も大切なる華客たる日本の製品の綿布に對し、高率の關稅を賦課しようとするのである。右の明文の主旨に反した不誠意極まる處置たる事は云ふまでもない。日本豈に黙すべきや、怒るのが本當である。仍て日本側ではさう云ふ横車を押すなれば、こちらも印度の綿を買つてあげない迄と、綿花、紡績關係側の人々は力み立つたのであるが、苟くも商賣に賣つてあげない買つてあげないでは全く何の商賣か分らぬ。そこを一つ何と

からまく相談しようと思ふのが今日のシムラ會議である。印度政府がかうした暴舉に出づるには矢張り相當な理由がなくてはならぬ。それに就ては何より過去に於ける印度と日本との商賣關係を知らなくてはならない。

(B) 貿易關係

印度は實以つて云ふと日本に取つて現在よいお客である。過去廿五年の統計を示すと左の通りである。

明治四十年以降日印貿易額

(單位千圓)

| 種別 年次 | 輸出 | 輸入 | 合計 | 入超 | 種別 年次 | 輸出 | 輸入 | 合計 | 入超 |
|----------|--------|---------|---------|--------|----------|--------|---------|---------|---------|
| 明治40年 | 13,089 | 74,593 | 87,681 | 61,505 | 大正元年 | 23,648 | 134,741 | 153,389 | 111,093 |
| 明治41年 | 13,631 | 49,328 | 62,959 | 35,697 | 大正2年 | 29,873 | 173,173 | 203,046 | 143,300 |
| 明治42年 | 14,422 | 65,157 | 79,582 | 50,732 | 大正3年 | 26,048 | 160,324 | 186,372 | 134,276 |
| 明治43年 | 18,712 | 106,361 | 125,073 | 87,649 | 大正4年 | 42,202 | 147,585 | 189,787 | 105,383 |
| 明治44年 | 20,316 | 96,695 | 117,011 | 79,379 | 大正5年 | 71,617 | 179,464 | 251,081 | 107,847 |

| | | | | | | | | | |
|-------|---------|---------|---------|---------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 大正6年 | 101,208 | 223,941 | 325,149 | 122,733 | 昭和元年 | 153,951 | 391,136 | 547,087 | 235,185 |
| 大正7年 | 202,522 | 268,165 | 470,687 | 65,643 | 昭和2年 | 167,590 | 270,292 | 238,172 | 103,012 |
| 大正8年 | 116,878 | 319,477 | 436,355 | 202,599 | 昭和3年 | 145,006 | 284,798 | 430,804 | 133,792 |
| 大正9年 | 192,249 | 394,930 | 587,179 | 202,681 | 昭和4年 | 193,056 | 288,119 | 485,175 | 90,063 |
| 大正10年 | 84,503 | 210,365 | 294,868 | 125,862 | 昭和5年 | 129,232 | 180,405 | 309,667 | 51,143 |
| 大正11年 | 97,203 | 254,088 | 251,591 | 156,885 | 昭和6年 | 110,367 | 133,165 | 243,532 | 22,798 |
| 大正12年 | 99,619 | 305,718 | 405,337 | 205,099 | 昭和7年 | 192,191 | 116,865 | 309,056 | 75,626 |
| 大正13年 | 135,373 | 387,791 | 523,164 | 252,4.8 | 計 | 2,973,339 | 6,337,539 | 3,010,878 | 3,664,200 |
| 大正14年 | 172,413 | 573,563 | 746,976 | 400,150 | | | | | |

過夫三ヶ年の輸出の主なるものは

註 ※は田畑を示す

日本對印度主要貿易品三ヶ年對照表

(單位圓)

| 年次 | 輸出品目 | 昭和五年 | 昭和六年 | 昭和七年 | 年次 | 輸出品目 | 昭和五年 | 昭和六年 | 昭和七年 |
|------|------|------------|------------|------------|------|------|-----------|-----------|------------|
| 昭和五年 | 物及物 | 61,216,254 | 49,866,019 | 80,653,540 | 昭和五年 | 糸 | 6,575,986 | 5,592,234 | 14,343,099 |
| 昭和六年 | 物及物 | 16,781,513 | 21,524,617 | 32,956,502 | 昭和六年 | 大小製品 | 7,948,919 | 3,901,436 | 6,698,774 |
| 昭和七年 | 物及物 | | | | 昭和七年 | | | | |

| | | | | | | | |
|---------|-----------|-----------|-----------|-------|-------------|-------------|-------------|
| 硝子及同製品 | 2,888,007 | 2,239,016 | 4,106,245 | 卸物 | 412,932 | 319,374 | 635,793 |
| 陶磁製品 | 1,867,367 | 1,391,511 | 3,463,192 | 手巾 | 183,406 | 63,385 | 591,979 |
| 鐵製品 | 1,712,551 | 1,762,134 | 3,322,435 | 製毛 | 412,568 | 262,822 | 363,820 |
| 眞鍮 | 1,838,755 | 1,150,797 | 2,939,896 | 手織布 | 260,247 | 318,836 | 355,763 |
| 身邊粧飾用品 | 1,695,795 | 1,142,666 | 2,070,944 | 傘 | 410,316 | 212,427 | 314,061 |
| 木玩具 | 1,529,635 | 1,762,654 | 1,529,635 | 他 | 28,653 | 45,109 | 265,196 |
| セメント | 1,069,387 | 711,348 | 1,465,720 | 子 | 14,674 | 21,956 | 251,631 |
| 紙類 | 746,331 | 1,038,915 | 1,307,066 | 刷 | 99,579 | 61,957 | 172,705 |
| 洋燈及同部分品 | 925,387 | 983,457 | 1,160,983 | 石 | 44,221 | 30,818 | 98,855 |
| 機械及同部分品 | 685,214 | 616,800 | 972,737 | 燐 | 12,335 | 4,144 | 76,989 |
| 硝子 | 481,485 | 309,049 | 909,351 | 魚油 | 89,210 | 18,655 | 59,905 |
| タ | 728,683 | 470,525 | 900,034 | 荷 | 35,477 | 24,502 | 49,604 |
| オ | 506,879 | 497,444 | 898,839 | 植物性脂肪 | 64,183 | 45,355 | 49,404 |
| ル | 777,120 | 436,193 | 877,032 | 油 | 15,562,214 | 12,851,407 | 6,665,666 |
| 酒 | 643,079 | 649,807 | 694,415 | 計 | 129,262,375 | 110,367,354 | 192,491,854 |

これに對して印度から輸入するものは綿、鉄鐵を筆頭として過去三年の數字を擧げると、

昭和五年 一八〇、四二四、五七七

昭和六年 一三三、一六五、二五一
昭和七年 一一六、八六五、四七〇

即ち日本の對印貿易關係は今後爲替安を利用して益々好望にあるのである。而して當面の問題となつて居る綿布に就て日、英、印の關係を數字上から眺めて見ると、

印度綿布生産高及輸入高 (單位 百萬碼)

| 種別 年次 | 印度綿布 生産高 | 綿布總 輸入高 | 内英國 製綿布 | 内日本 製綿布 | 種別 年次 | 印度綿布 生産高 | 綿布總 輸入高 | 内英國 製綿布 | 内日本 製綿布 |
|----------|-------------|------------|------------|------------|----------|-------------|------------|------------|------------|
| 1913年度 | 1,164 | 3,197 | 3,104 | 9 | 1923年度 | 1,702 | 1,486 | 1,319 | 123 |
| 1914年度 | 1,136 | 2,446 | 2,378 | 16 | 1924年度 | 1,701 | 1,823 | 1,614 | 155 |
| 1915年度 | 1,442 | 2,184 | 2,049 | 35 | 1925年度 | 1,954 | 1,564 | 1,237 | 217 |
| 1916年度 | 1,578 | 1,934 | 1,786 | 100 | 1926年度 | 2,258 | 1,788 | 1,467 | 244 |
| 1917年度 | 1,614 | 1,556 | 1,430 | 95 | 1927年度 | 2,357 | 1,973 | 1,543 | 323 |
| 1918年度 | 1,451 | 1,122 | 867 | 238 | 1928年度 | 1,893 | 1,937 | 1,456 | 357 |
| 1919年度 | 1,640 | 1,081 | 976 | 76 | 1929年度 | 2,419 | 1,919 | 1,248 | 562 |
| 1920年度 | 1,581 | 1,510 | 1,292 | 170 | 1930年度 | 2,561 | 890 | 523 | 321 |
| 1921年度 | 1,732 | 1,090 | 955 | 90 | 1931年度 | 2,990 | 776 | 384 | 340 |
| 1922年度 | 1,725 | 1,593 | 1,453 | 108 | 1932年度 | (調査中) | 1,200 | 587 | 578 |

更にこれに綿糸を加入して金高に換算して見ると。

三〇

日本製綿糸布印度向輸出額 (單位圓)

| 種別 | 年次 | 對印總輸出額 | 綿 絲 | | 布 | | 輸 出 額 | 合 計 |
|------|------|-------------|------------|---|-------------|---|-------------|-----|
| | | | 綿 | 絲 | 綿 | 布 | | |
| 昭和二年 | 昭和二年 | 167,580,191 | 20,040,131 | | 86,126,986 | | 105,167,117 | |
| 昭和三年 | 昭和三年 | 146,006,638 | 9,181,071 | | 70,185,408 | | 79,366,479 | |
| 昭和四年 | 昭和四年 | 198,056,969 | 13,448,318 | | 109,133,997 | | 122,587,315 | |
| 昭和五年 | 昭和五年 | 129,262,375 | 6,575,985 | | 61,216,254 | | 67,792,240 | |
| 昭和六年 | 昭和六年 | 110,357,354 | 5,592,234 | | 49,866,019 | | 55,458,253 | |
| 昭和七年 | 昭和七年 | 192,491,854 | 14,343,039 | | 80,653,540 | | 94,995,639 | |

何と云つても日本製品は價低廉である。それは勞働賃が安い上に、日本人は器用で悪い原料で善い品物を作る。而も機械などもランカシャの様なオールド、ミスでなく、澄洸たる青年だ。尙更にインフレーションの爲替安は買手に取つては何よりの有難い事である。而しこれでは英國の金庫に穴があいて来る。否悲鳴を挙げ出したのがランカシャの紡績業者だ。茲に於て英、

印政府は腹を合して日本彈壓と出たのである。

(C) 高壁の關稅

印度政府は先年日本綿糸に對し關稅を引き上げ成功した爲、更に綿布等に對しても一九三二年八月以來五割の高率を課して來た。過去に於ける關稅引上げの經過左の如し。

印度綿絲布關稅引上經過一覽表 (一安は〇、〇四金圓)

| 年次摘要 | 綿 | 布 | 綿 | 絲 |
|---------|--------------|--------------------|---|----|
| 一九三〇年四月 | | | | |
| 英國製 | 一般綿布 生地綿布 | 從價 一割五分 從價 一割五分 | | 同上 |
| 其他諸國製 | 一般綿布 | 又は一封度三安半 | | |
| | 生地綿布 | 從價 二割 又は一封度三安半 | | |

| 一九三一年四月 | | 一九三一年九月 | | 一九三二年八月 | |
|------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 英國製 | 其他諸國製 | 英國製 | 其他諸國製 | 英國製 | 其他諸國製 |
| 一般綿布 從價 二割 | 一般綿布 從價 二割五分 | 一般綿布 從價 二割五分 | 一般綿布 從價 二割五分 | 一般綿布 從價 二割五分 | 一般綿布 從價 二割五分 |
| 生地綿布 又は一封度三安半 | 生地綿布 又は一封度四安三七五 | 生地綿布 又は一封度四安三七五 | 生地綿布 又は一封度四安三七五 | 生地綿布 又は一封度四安三七五 | 生地綿布 又は一封度四安三七五 |
| 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 |

印度政府は右に飽き足らず更に最高七割五分の高税をかけ様とするのだ。この税率は印度の自國産とも云ふべき英國製品の三倍に當るのである。尙人絹に對しても無茶苦茶の高税を課するのである。

(D) 結局損をするものは

印度政府の横車で結局損をするものは誰であるかと云ふと、それは印度人だ。第一日本が印綿を買はないと云ふと農民の困るのは明である。第二に若し日本の製品が印度に入らないとしたならば、一般に購買力の少ない印度人は嫌應なしにランカシヤあたりの高價なる製品を買はなくてはならない。英國人が自分可愛さに横車を押す事は印度人が最も困ると云ふ結論に到達

するのである。搾取に搾取を重ねられる印度人が、此間に處して如何なる態度に出るか蓋し觀物である。

日本は印綿を買はなければ勿論米綿、エチプト綿、トルコ綿、更には南アメリカ、滿洲あたりから補充の出来る事として差當り困るものではないが、技術の優秀な點から惡品を良品に出来る立場、即ち粗惡なる印綿を最も有効に働かす日本に取つては無理に米綿あたりの高級品を買ふと云ふ事は不利であり、何しろ將來のある三億五千萬と云ふ大華客を一時の立腹より失ふこと、否何の罪もない印度人に八當りをやると云ふ事は得策でない。これがシムラ會商の生れる所以であるが、果して會議は成功するか？現在の興味は繋がつて此處にある。

四、印度を旅行する人に

日本から印度へ渡るに就ては客船として直接印度行きと云ふのがないので、郵船(N、Y、K)なり、商船(O、S、K)なりの貨物船に便乗するか、コロンボ迄客船で行つて他船に乗り換へ印度へ入るより途がない。(但し外國船便乗は別)

(A) 印度内地旅行の準備

大都市から大都市に旅行して一流ホテルで暮す人は別であるが、少し田舎にでも旅行しようと云ふ人は必ずや寢具から炊事道具まで持つて行かなければならないので随分厄介である。だからから云ふ人は印度に入るや直ちに印度人のボーイ……と云つても苦力クワリに屬するが、さう云ふものを雇入れるがよろしい。少くとも多少英語でも解するものを。かうした下層階級の者ではあるが英語の達者なものがいくらでもある。人間としてはベルシヤ系の人間即ちボムベイを

中心とするパーシー人を雇ふがよい。彼等は正直で勤勉である。

かうしたものを連れて歩くとそれだけ費用も嵩むと云ふわけであるが、そこはよくしたもので、汽車でも一二等には彼等下僕氏等の室があり、而も汽車賃も格安である。月給なんかも非常に安い。何しろ彼等の生活は一日十錢もあれば充分であるから。殊に彼等は主人と決して同所に寝ず——大概是屋外の地面上に——食物も絶対に主人のものを食べず、彼等の支給された給金の中から作つて食べるので却て好都合だ。

佛陀の舊蹟でも巡拜しようと云ふ人は常に淨水が得られないので何か濾過器でも持つて行かないと直ぐやられる。服装は出来るだけ簡單がよい。旅行期は先づ十一月より三月の下旬迄が好適であらう。

(B) 汽車旅行の注意

遠方の旅行には前もつてトーマス、クック(Thomas Cook)邊りで切符を買ひ席を注文して置く^{レザイク}とよい。晩になればその場所が直ぐ寢臺となるから都合がよい。唯注意すべき事は南京虫

の襲來で、これに對する藥は夢忘れてならない。更に厄介なのは印度の赤帽と云つても苦力であるが、これの不統一なものには一苦勞である。印度の旅行は何しろ鍋釜まで持つて行かなくてはならないので相當に荷が嵩む。印度の赤帽否苦力はよしステッキ一本でも荷物は荷物だから一人がこれ運ぶ。一人で荷物を幾個も運ぶと云ふ事がない。而もそれが全く無秩序で何處へ行くか知れたものでないので、これを統制するに相當骨が折れる。氣の利いたボーイが居ればこの苦勞は減少する。

それから汽車内へは相當澤山荷物を持つて入る事を許すが、外國人と見ると成るだけ預けさす工夫をする。而も荷物の重量をかける奴が必ず貫目を誤魔化し金目にする。これは安月給で働く印度人には無理もない事であるが實に不愉快だ。かう云ふ事は有り勝ちの事であるから、先づ前以つていくらかつかまして目を誤魔化して貰ふのであるが、それで結局本當の賃金になる位だ。而しこれは憫れな印度人によつて功德を積むと心得ればよい。

(C) ボツクセス

ボックスと云ふのは日本語の「酒代」（酒代）獨逸語の *Trinkgeld*（飲料）（のむしろ）に相當すべきものであるが、實に印度人のは五月蠅い。何も仕事させなくても何とか因縁つけてこのボックスをねだるのでやり切れない。馬車にでも乗つて約束の賃金で家まで歸ると、この馬車屋は半日でも戸口に立つてまだねだつて居るので、こちらが根負けする。ホテルに泊つて出發する時には、ホテル全部のボーイが一行になつてこのボックスをねだる。赤帽の苦力は發車まで汽車に囁りついてねだる。

かうした時には兼て用意して置いた小錢で追拂ふわけであるが、汽車などでも發車間際までやつてはいけない。それは何遍でもまたねだるからである。兎も角印度旅行に小錢は常に多く用意して置く必要がある。

(D) 食物

米（ライス）と牛乳（ミルク）とは何處へ行つても事を缺かぬから生命には別條ない。印度人は米よりもむしろブリーと稱する小麥のパンを常食とする。これは美味なものである。小麥粉と云つても皮が半

分も雜つて居る。程實は美味だ——のを唾半分と捏ねて煎餅様に作りこれを炭火で焼いたのにバターを溶かしたギイと稱する油が塗つてある。但しこのギイは下等なものになると臭くて食へない。

有名なのはカレーだ。だが御飯よりもカレーと唐辛子の多い所謂ライスカレーは、日本人には到底始めは食べられない。これを無理して食べると、必ず尻の方をやられる。但し熱さを殺し、菌を殺すにはかうした食物も又一面必要なので、追々馴れて辛いのに向上することだ。馴れた頃には實に何とも云へぬ美味なもので、特に椰子の實で種々技巧の凝してあるものはなかく風味がある。

印度教徒には牛肉は禁物であり回々教徒には豚は忌み物であるから、餘程注意せなければ飛んだ事になる。そして絶対に彼等の食器に觸れてならない。彼等はこれを穢れとして大變嫌ふのである。尙汽車旅行中停車場などで買へる一杯の紅茶は一食の代理をする程營養に富み美味である。印度人は手掴みで食べるから勿論箸やフォーク、ナイフの用意はないので、これも常に携帯する事を忘れてならない。

(E) 言語と文字

旅行するには大概英語で通じるが、田舎へ行くと全然通じない事がある。だが現在二百二十種もある言葉を覚えるなど僭越である。一枚の紙幣にも十種の文字が書いてある程言葉も複雑であるが大概ヒンドゥスターニー(Hindusthani)を知つて居れば通じる。文字も出来る事なればデーバナーガリー書體(表紙参照)か、ウルドゥ文字を知つて居れば便利である。前者は塔婆に書いてある文字—今は使用せぬ—から變形したもので、後者の方はキリヤージと云ふ煙草の箱に書いてある文字であつて、まるで汽車の煙の様な書體である。これは左から右へ書く。挨拶一つでも印度教徒では今日は(今晚にもお早うにも左様ならにも通ず)はナムステ、或はラーマ、ラーマであるが、これを回々教徒の使ふサラームとやつてはいけない。宗教上の習慣の區別は實に印度で厄介である。ついでに印度の寺へは靴のまゝでは絶対に入つていけない。これも穢れである。

五、名所舊蹟案内

旅行の要意やその心得が出来たらボツ／＼印度旅行に出かけるわけであるが、印度旅行に出る前に、同じく英領印度のビルマの首都に船が寄つたら勿怪の幸ひであつて先づ此處を見物せずばなるまい。

ラングーン市

ラングーン河に沿ふ印度第七の大都市である。この地上陸して一番目につく事はビルマ人の顔が日本人と少しも違はない事だ。婦人は豊満で綾羅の美人がシャナリ／＼歩く姿は誠に游子の心を躍らす。

スウエ、ダゴン、バゴダ バゴダと云ふのは塔の意味であるが此國は塔の多い國だ。而もこの塔中で一番大きいのが此市の此塔であつて高さ六百六十八尺、黄金の一大柱が天に沖し隣りのローヤル公園の池に姿を映す。此塔は金箔が次から次と信者によつて塗られて行くのでいつも輝いて居る。従つて門前には金箔を賣る店が多い。尖塔にある三角形の旗は黄金板でダイヤモンド等の寶石の數實に四千六百餘個、國王、信者の寄附である。此寺へも絶対に靴穿きで入れない。

附近のペグーの涅槃像は大きいので有名であり、舊都マンダレーには見るべきものがあるが餘りに遠い。

カルカッタ

ラングーンから船で凡そ二日の行程、恒河の河口フイーグリー河を八十哩遡ると恒河を跨いた印度第一の此市に着く。此市を見物するには少くとも三日は必要だ。そして何を見ても實に珍らしい。大厦高樓の並んで居る第一街をチョウレンゲと云ふ。

ヴィクトリア、メモリアル 市の中央に廣場（マイダン）があり其の中央にヴィクトリヤ女皇の記念館がある。如何にも大英帝國の建國を語る。

此市の博物館は世界有数のもので殊に佛教美術學者は見逃してならない。競馬場、植物園、動物園も世界有数のものである。ジャイナ教の本山は郊外のチトプールにある。

ダーズリン

口絵を参照されたい。六千八百尺の觀望臺オブザーバトリーから眺めたヒマラヤ連峰の美觀は天下第一品である。世界第一の高峰エベレストを見るには此處から六哩距つた虎ヶ丘タイガーヒルまで行かなくてはならない。ダーズリンまで行くヒマラヤ鐵道は又一つの名物だ。有名なダーズリン茶、毛皮等を仕込むがよい。

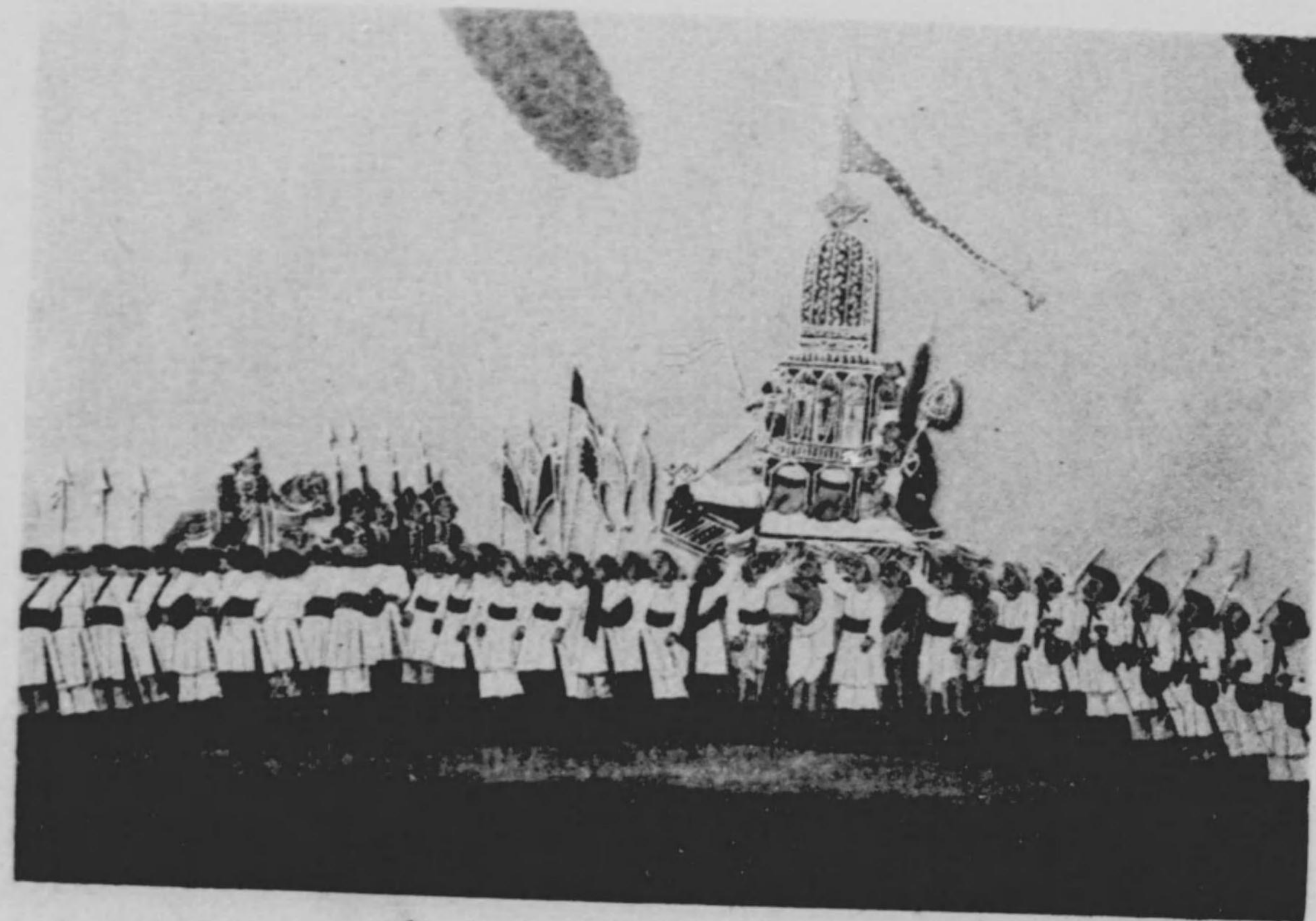
タゴールの學校

カルカッタから西方百哩、一小村ボルプールにあるタゴールの建設の平和學園シャンティニケタに行つて印度の青年淑女に接するのもよい。また都合がよければタ翁にも逢へる。

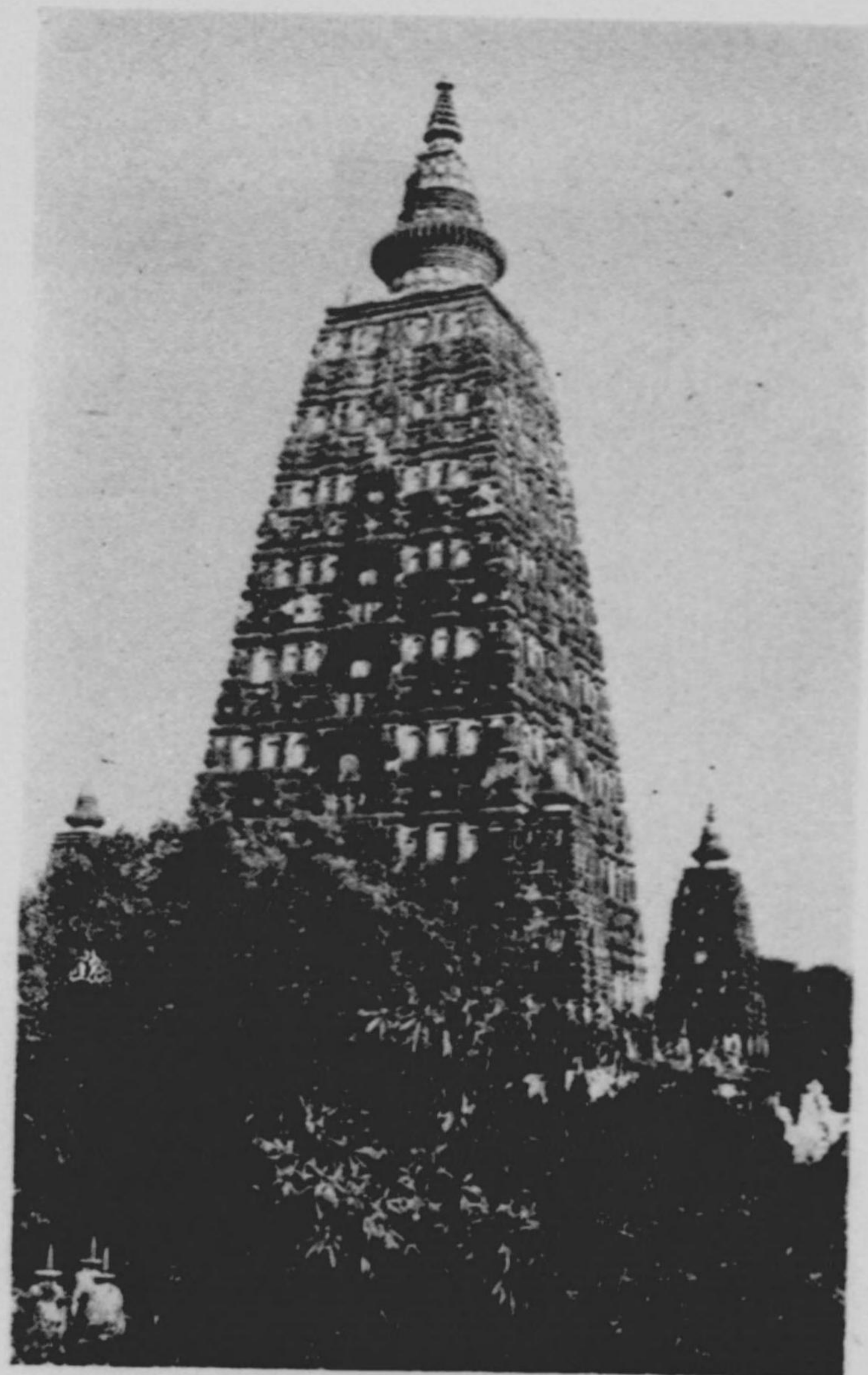
ジャガナート寺



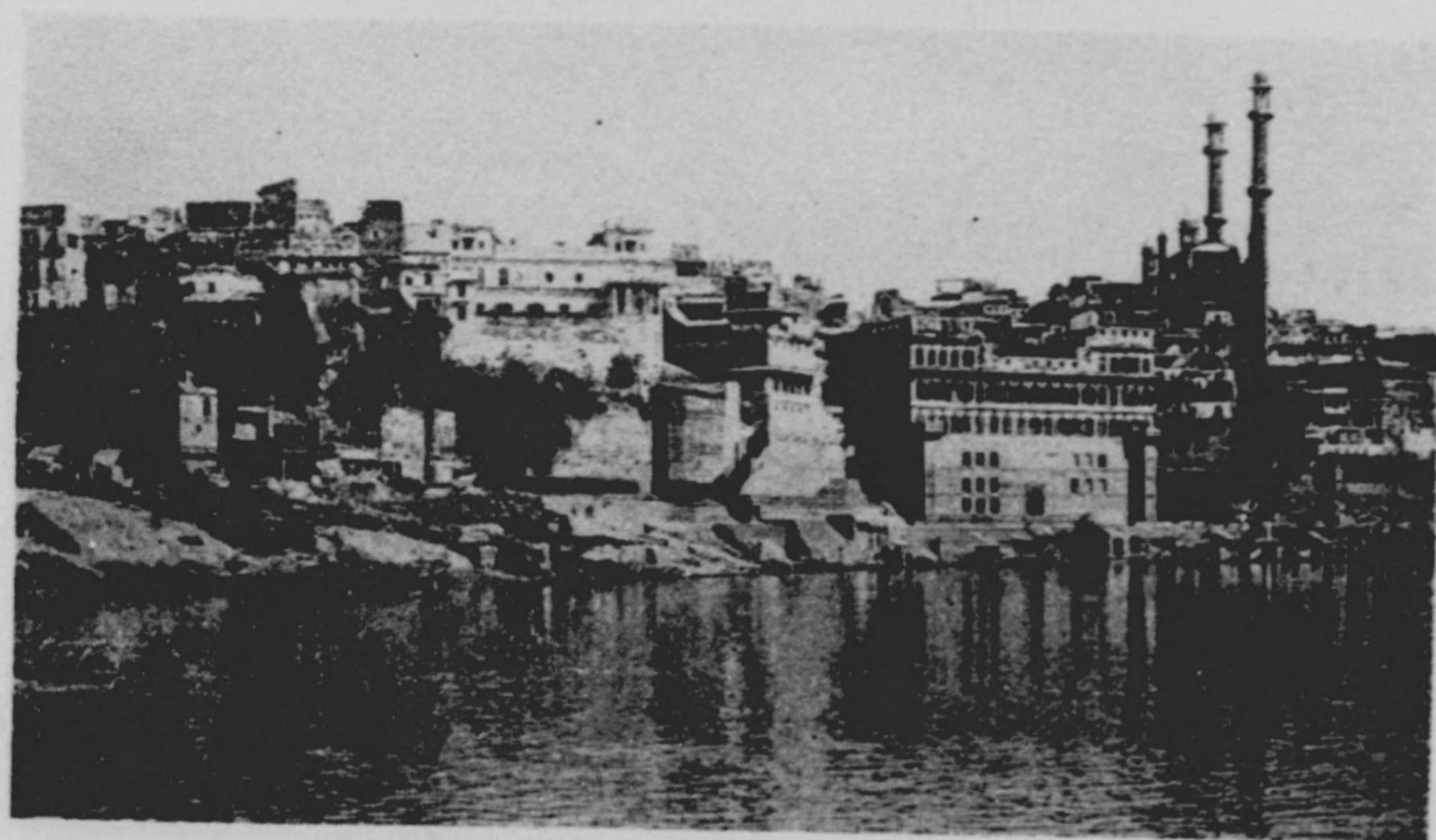
カルカッタの街（綿糸布市場）



ジャガナートの車山



佛陀伽耶根本大塔



ベナレス

BEHAR
MUSEUM
NO. 100

カルカッタより南方三百哩、白塔寺ホワイトパゴダの名で有名な寺がある。此處だけは印度人中の最上階級ブライトマンも賤民も共に神前では食事が許されるのである。然るに此處の神様は年に一度御不例を仰せ出され附近の海水浴場プリー市に轉地療養にお出ましになる。そのお輿否山車が大變なものだ。汽車に依る見物の團參が三百萬人と云ふからお祭りの騒が知れよう。山車(十六臺)の下で死ぬものがあるこれは極樂への捨身の往生なのだ。

ブツダガヤ

ガヤ市で降り行くのであるが七哩距つて居るから自動車か馬車で行くがよい。但し馬車の方が印度氣分がする。異様な植物が吾人を引きつける。しかしシャボテンの林を押し分けて佛像を賣りに來る奴から無暗に買つてならない。

尼達河

此河は釋迦が六年苦行の後苦行の無駄を知つて、始めて沐浴した河である。釋迦は一日一麻、一米で修行した爲、一時に疲れが出て溺れんとしたが僅かに堤畔の草木に依つて事なきを得、その時村長の娘ナンダの捧ぐるミルク、ライス(これは非常に美味で營養に富む)で元氣回復し、終に成道したと云ふ傳説の河であつて、參道に沿ふて居る。平生は河原である。この河を通じて遙かに正覺山が見える。

根本大塔

佛教徒の聖蹟中の聖蹟で一八〇尺の大塔は巍然として聳えて居る。此塔は昔回々教徒の破壊を恐れて自ら地中に姿を没したと云はれて居るが一八七〇年頃再び掘り出したものである。釋迦が惡魔の誘惑と戦ひつゝ冥想せる金剛寶座並にその座を蔽ふ菩提樹は塔の裏側にある。

ベナレス

聖河ガンガーに面するこれは印度教徒の靈場中の第一のものである。日々の群參が絶えず恒河に浴し罪垢

を落す姿は奇観である。此處はシバ神の本山でその表徴たる男根リッダが祭つてある。而し寫眞の如く(右側大塔)マホメットの寺院(モスキユ)があるのは皮肉である。特に眞鍮細工が有名だ。

サルナート 鹿野苑のことである。佛陀が成道後始めて法を説かれた土地で、今は八十四呎の迎佛塔、ダメーク塔が残つて居る。ベナレスの郊外四哩の地にある。

アラハバード

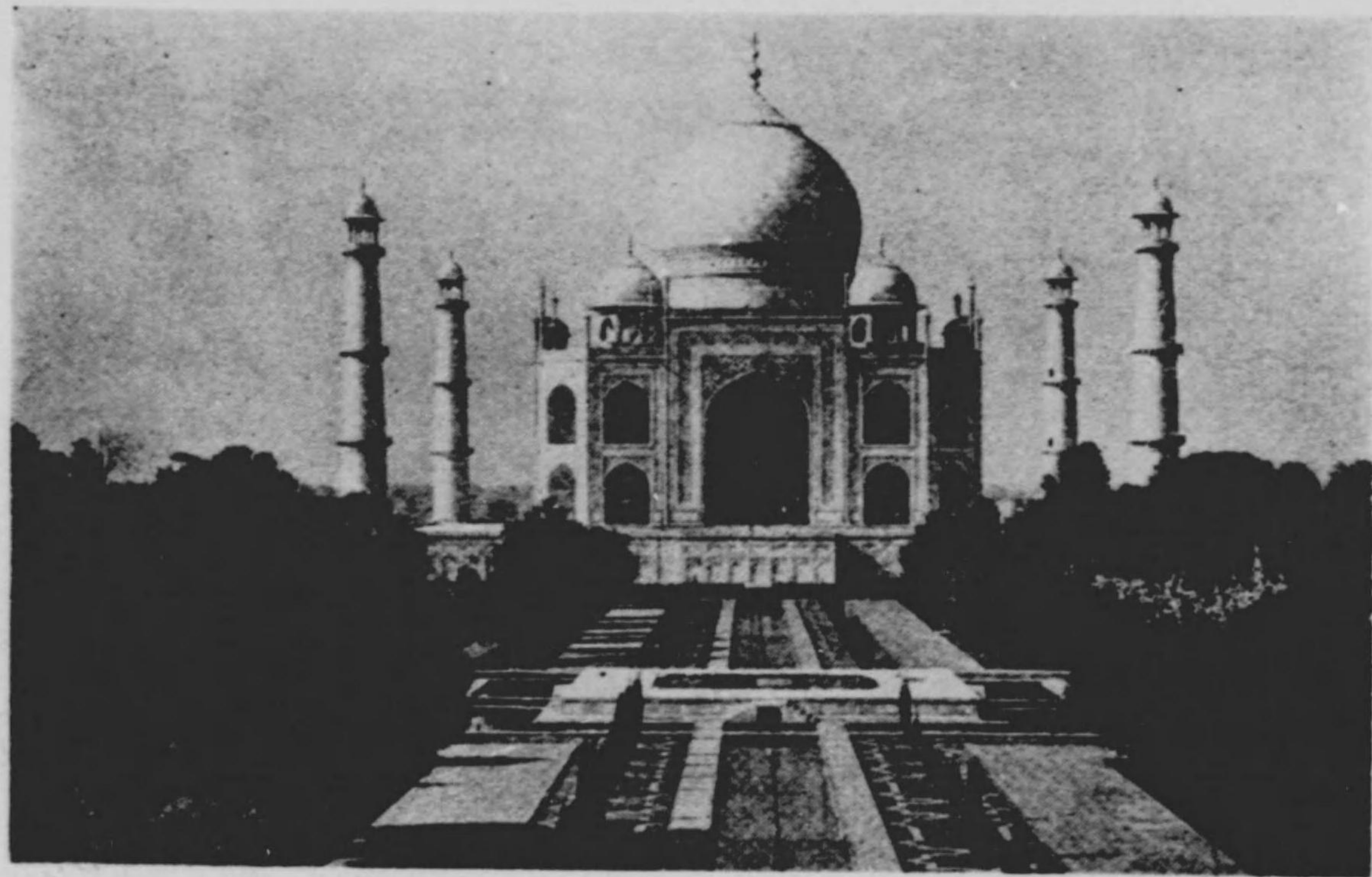
一五八三年回々教の聖王が建設した城壁は有名で、印度教徒の聖河とする恒河の支流ヤムナー河に面し印度教徒の聖地である。コレラ等が多いので注意する必要がある。

ラクノー等

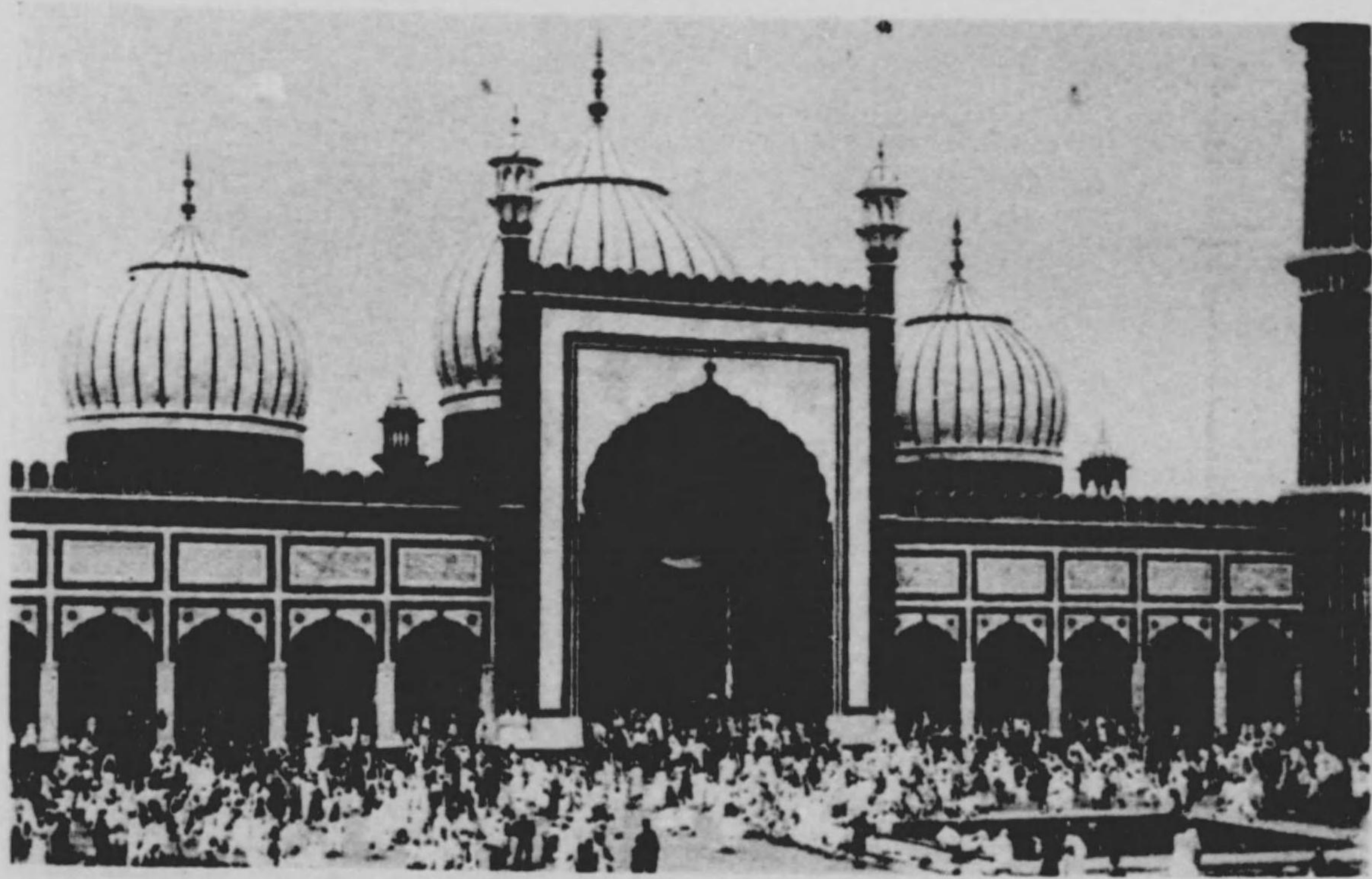
オウド國の首府である。此處の動物園、植物園は一見する價値がある。殊に動物が殆んど野生のままに放置しあるのは彼のハーゲンベックの動物園とよい對比である。ラクノーまで來たらオウドの昔の首府アヨダヤ(難攻不落)城迄足を伸ばし、彼のラーマ物語りの發生地、並にゴゲラ河を距てたファイザバードを見物して傳説、歴史を味ふのもよい。

アグラのタチマハール

タチ、マハールを見ずして結構と云ふ勿れとは印度人の口癖である。モガール王朝シャジャハーンが寵妃マンターズ、マハールの墳墓として十八ヶ年の歲月と人力、富力を盡して建設したものであつて、白亜の大堂は美しくヤムナー河に影を映す。内陣の玉垣のシンメントリカルの透し彫、鏤められたる寶石、回々教文



ル - ハ マ ・ ギ タ 光 日 の 度 印



寺 ト ツ ジ ス マ ・ マ ム ヤ ジ の 市 - リ デ

化の結晶である。シヤジャハーンはヤムナ河を距て、自らの墳墓を黒大理石で作り妃との間に戀の白銀の橋を架せんとして得ず、今は妃の側に眠つて居る。

カーヌ宮殿の浴場 昔王が多くの美女に取巻かれ、所謂トルコ式のハレムを作りつゝこの大理石づくめの風呂に浴したのであるが、今も清冽な水が滾々と大理石を潤はして居る。

アクバル大帝の墳墓 アゲラより數哩離れたところにある。而もその墓は全くコスモポリタンで十字架もあれば印度教、回々教式もある點に興味がある。尤もこれは王がスペインの女まも侍女として置いたと云ふにあるが、王は大人格者で元來回々教徒でありながら宗教的差別をしなかつたことを象徴して居る様にも思へる。

デリー

今はカルカッタに取つて代つて首府となつたところであるが印度政廳はニューデリーの方にある。

ジャムマ、マスジト 回々教徒の禮拜堂で印度中で一番大きい集會所である。ジャムマとは金曜日の事で教徒が往々數十萬集合禮拜する様は偉觀である。

デリー城 はその規模の大なる事に驚かされる。而も大理石づくめであり、涼風絶えず、見はらし好く、此世の樂園である。「此處こそ此世のバラダイス」とウルドゥ文字で彫つてある。中へ入つて行くと六尺四方の大理石の壁があるがその美事な藝術的作品は天下の奇寶である。

アムリツサー

彼のダイヤールが無辜の印度人を五千人も殺傷して一躍有名になつたところであるが、今も彈痕が残つて居

る。印度人がこれを見て血を沸かすも無理もない。北部印度に於ける商業都市而も印度色の濃厚なるこの町の氣分を味ふべきである。

黄金寺 ゴlden Temple は彼のシーク教の本山で二階から圓屋根まで黄金色に輝いて居る。彼のシーク宗の聖典グランドサヒーブのあるのは實にこの寺である。

ラホール

歴史の市、印度第六番の大都市も今はデリー等にお株を奪はれ活氣がない。しかし歴史を知る者には見逃せない市である。尙この博物館は佛教美術を研究するものには收穫が極めて多い。

シユリナガール

カシユミールの首府である。天下の樂園である。印度人の皮膚も此處まで来れば最早黒くなく、彼の有名なカシユミールの刺繍をする娘達が美しい。この地は沼地が多いので船を家とするものも多い。これより更に進んで北方大ヒマラヤを展望して印度氣分を養ふ事が必要である。

茲より更にベシヤワール地方に入り、過去佛教の榮えし跡に健駄羅美術の餘韻を探るのも一部の人には興味多き事であらう。

ボムベイ

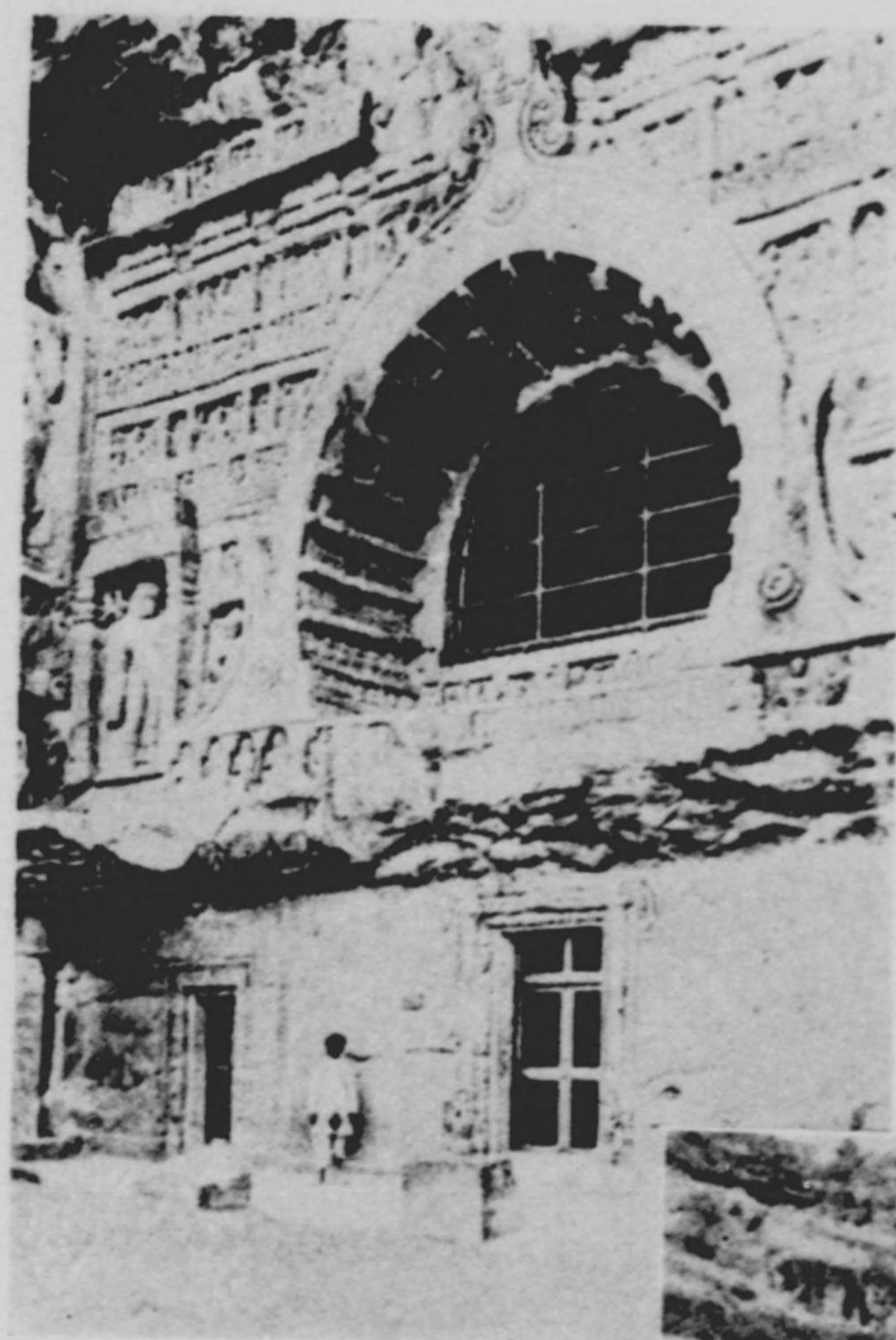
綿の集散地として有名であり此意味に於て日本人と關係があり、又それだけに日本人は大に感服つて通れる市である。此市の創設者は例の拜火教徒パーシー族である。



歐鳥イベンボ



塔の黙沈



ア
ヂ
ヤ
ン
タ
の
洞
窟



エ
ロ
ー
ラ
の
カ
イ
ラ
ー
サ
寺



沈黙の塔 元來パーシー族は死骸を禿鷹に供養する。年々二百程の全裸の骸は彼等の餌食となるのであるが、この骸を収める塔を沈黙の塔と呼び五基ある。最大なものは周圍二百七十六呎高さ廿五呎であるがこの塔中は所謂隱亡以外は絶対に誰人も入れない。塔の見物には許可が入る。パーシー人は年々この鳥が減少するのを憂ひてこれを養つて居る。遙かボンベイ灣を望む風光絶佳のマラバル丘を散歩するとこの鳥をよく見るが實に陰惨な相貌である。

猿寺は彼の巴里のノルトダム寺に比すべく、コロバ沿岸のドライブは確かに暑さを忘れさす。ヴィクトリヤ公園も美しい。エレハント洞穴はボムベイより一時間の沖にあり、大象の石刻が有名で、風光絶佳の場所である。海拔約六百尺、又暑さを忘るゝに充分である。

アチャヤンタの洞窟と壁窟

佛教美術史上最も有名な場所である。岩山を切り開き洞窟としこれを寺としたものであるが、其數廿三。人力の威大に驚くばかりであり、その壁畫は最も有名で、佛教美術家は必ずや一度は此地に歩を拄ぐ可きであらう。

エローラの洞窟

アジャヤンタに比して何れ劣らぬ有名な洞窟である。洞窟の數大小四十二。中に最も有名なるはカイラーサ寺である。これは岩を彫んで岩山を上から掘り下げたものでその規模の雄大、彫刻の美は誠に天下の偉觀美觀である。

サンチーの塔

佛教の大外護者阿育王に依つて建てられたるこの大塔は、又天下の偉觀であつて佛教美術家、佛蹟參拜者の夢見逃せないところである。

マイソール

香木の本場でこの輸出金額は大したものである。随つて町も活氣がありこの藩王も裕福である。王宮を拜し王の象に跨る大行列を拜觀するのも印度ならでは見れない圖である。

マドラス

東部沿岸の西港、人口六十五萬、印度第三の都市、皮革、椰子の實等の集散地である。大學はカルカッタ大學と比肩し、博物館はタミール文化を研究するものゝ忘れてならないものである。

マドゥーラ

シバ神を祭る大寺でその規模の大なるに驚かされる。東西南北の門は所謂印度教獨特の藝術であつて實にくどすぎる程のものであるが、信仰の結晶であらう。ホーリー、オブ、ホーリー即ち最聖の寺には本尊様が祭つてあるが、その神前の柱には奇怪な圖が彫刻してある。人間がかうしたらいかぬと云ふ神様の思召しの事であるが本尊様の前で自然主義の彫刻は實に滑稽である。

かうして所謂急行列車で印度廻りをしてマドゥーラからチューチニコリン岬に出て、船でセイロンのコロンボに渡る。

コロンボ

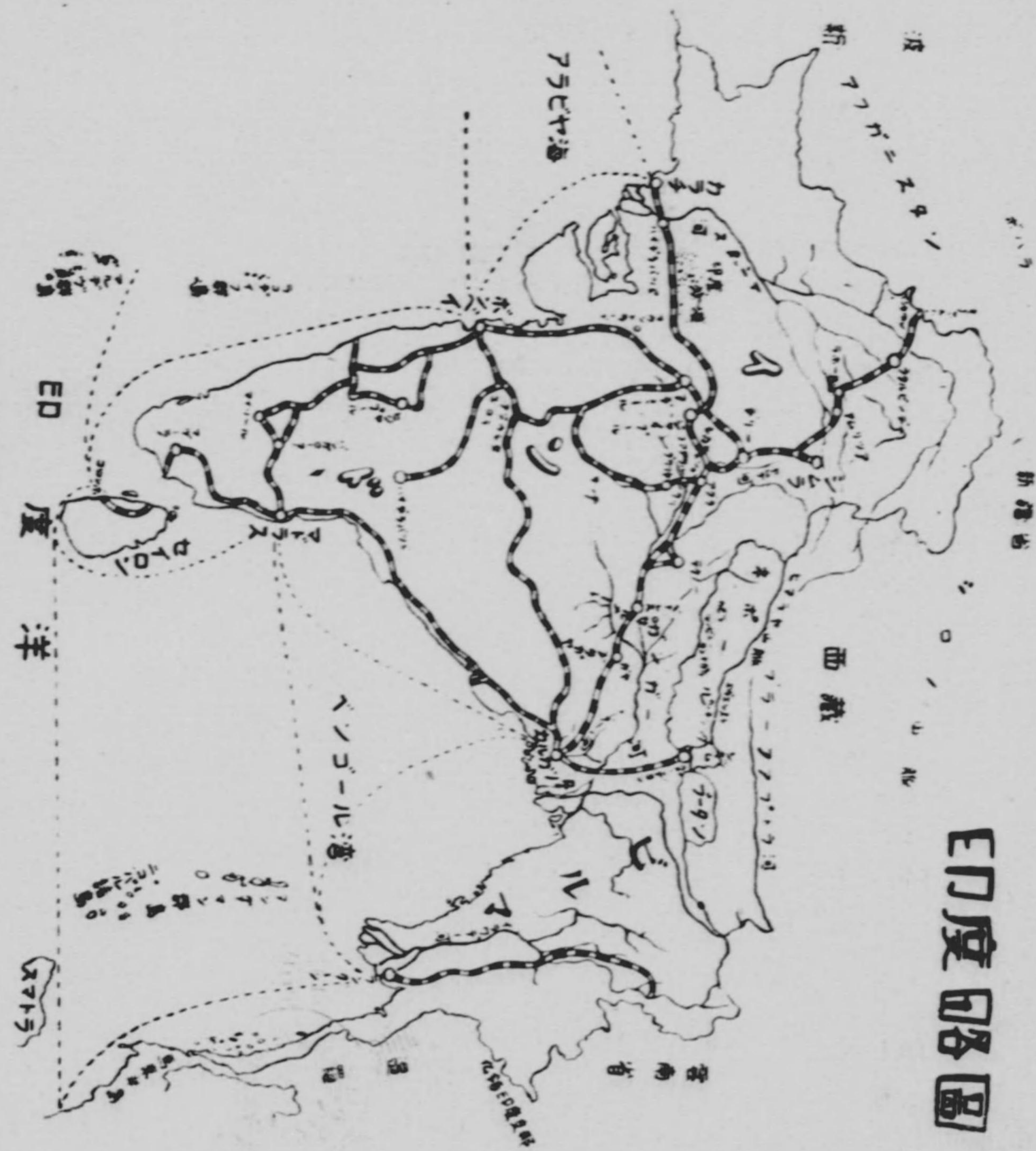
セイロン島の首府であつて、此處は印度の内地と異つて又別種の趣がある。男子は髪を結つて居るのが異様だ。所謂セイロンダイヤと稱するサファイヤーやルビー等を賣る店が軒を列ねて居るが用心せぬと模造品をつかませられる。セイロン茶も一罐や二罐は買つて歸るがよからう。

ペラデニヤ植物園 コロンボから自動車で三時間程の地點にある。熱帯の植物を見るには是非足を運ぶ必要がある。

キャンデーの佛齒寺 マツガワムブル キャンデーは千六百尺の高地にある。未だコロンボが首府にならない時代即ち王様が居つた時代の首府である。人口は三萬餘りで、前のペラデニヤ植物園の直ぐ近くである。否この植物園は途上にある。

キャンデーは避暑地であると共に、それより有名なのは佛の齒が祀つてある寺があるからである。ポルトガル人が最初この島を占領した時に随分この佛齒にも亂暴したものであるが、佛德廣大如何ともする事が出来なかつたと云はれて居る。寺の横には人工の大きな池があり椰子の林が美しく映じて居る。

セイロンに興味を有つ人は、更に北方に伸びて舊都アマラダブラ等に行つて佛教の史蹟を尋ねるのも無駄でないであらう（大橋戒俊記す）。



参考書

(部門的専門の範囲に入らざる)

(A) 旅行案内

J. Murry, Handbook for India, Burma and Ceylon, London 1920.

(B) 政治, 経済, 社会問題

H. Day, The Indian Tariff Problem, London 1933.

C. F. Andrews, The Indian Problem, Madras 1921.

翁久允, 今日の印度, 東京 昭和八年.

ボース著, 田邊宗夫譯, 桎梏の印度, 東京 昭和八年.

J. Doke, M. K. Gandhi, Madras 1921.

(C) 宗教, 哲学

高楠, 木村, 印度哲学宗教史, 東京 大正八年.

木村泰賢, 印度六派哲学, 同上.

宇井伯壽, 印度哲学研究, 東京 昭和年中.

(外国書にして此等に關するもの無数なるも略之)

(D) 印度歴史

V. Smith, The Oxford History of India (邦譯あり), Oxford 1920.

高桑駒吉, 印度五千年史, 東京 明治四十年.

(但し著書中の讀方, 術語の正確往々期し難し)

(E) 印度 (佛教) 美術

A. Foncher, l' Art Boudhique de l' Inde (邦譯あり), Tokio 1928.

松本文三郎, 印度の佛教美術, 東京 大正九年.

(F) 地圖

J. G. Bartholomew, Thacher's Reduced Survey Map of INDIA with Index. Calcutta 1914.

若し専門的に印度の各部門, 特に宗教哲学等に關する著書を知らんとする人は獨逸 Leipzig の Harrassowitz 書店より年々出づるカタログを参照されたい。

京都日印
協會設立
趣意書

日本文化の印度に負ふ所大なるは今さら取り立ていふまでもないことと思ひます。夫にも拘らず日本に於る印度の理解は深く大きいとは申されないので現狀ではありますまいか。通商貿易の關係が厚いといふ事實はあり乍ら、相互の理解と親善とが増進しないといふ事は相互の不幸であるばかりでなく、世界人類の不幸だと思ひます。そこで印度の文化や事情についての理解を増進する爲めに、京都日印協會を社交的機關として設立し、親善の資としたいと思ひます。どうか大方の御賛同を得てこの目的を成就せんことを切望します。

會則

- 第一條 本會ハ京都日印協會ト稱シ事務所ハ之ヲ京都市ニ設ク
- 第二條 本會ハ日印兩國ノ理解ト親善ノ増進ヲ圖ルヲ以テ目的トス
前項ノ目的ヲ達成スル爲左ノ事業ヲ行フ
 - 一、印刷物ノ刊行配布
 - 一、講演會
 - 一、會員ノ希望ニヨル印度ニ關スル照會調査並ニ紹介
 - 一、其ノ他適當ナル事業
- 第三條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

第四條

普通會員 會費年額一圓ヲ納ムル者
特別會員 本會ノ趣旨ニ賛シ特別ナル援助ヲ爲ス者ニシテ理事ノ推薦ニヨリ會長ノ承認ヲ經タル者
本會ニ左ノ役員ヲ置ク

第五條

一、會長 一名
一、副會長 二名
會長、副會長ハ總會ニ於テ之ヲ推薦シ、理事ハ會長之ヲ指名ス

第六條

役員ノ任期ハ二年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ

第七條

會長ハ本會ヲ統裁シ且代表ス
副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス
理事ハ會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ處理ス

第八條

本會ニ顧問ヲ置ク
顧問ハ會長之ヲ囑託ス

第九條

顧問ハ樞要ナル會務ノ諮問ニ應ズルモノトス

第十條

本會ハ毎年一回定期總會ヲ開キ會計會務其ノ他必要ナル事項ヲ議ス
定期總會ノ外會長必要ト認ムルトキハ臨時總會ヲ開クコトヲ得
本會ノ會計ハ曆年ニヨル以上

第十一條

昭和八年十月一日印刷
昭和八年十月五日發行

不許複製

發行所

奧博良

印刷者

藤澤淨圓

印刷所

同朋舎

京都市下京區河原町四條下ル招徳ビル二階
（京都市佛敎俱樂部内）日印協會
右代表者

京都市下京區壬生川通五條下ル

京都市下京區壬生川通五條下ル

發行所

京都市下京區
河原町四條下ル
招徳ビル二階
京都市佛敎俱樂部内

京都日印協會

631
304

